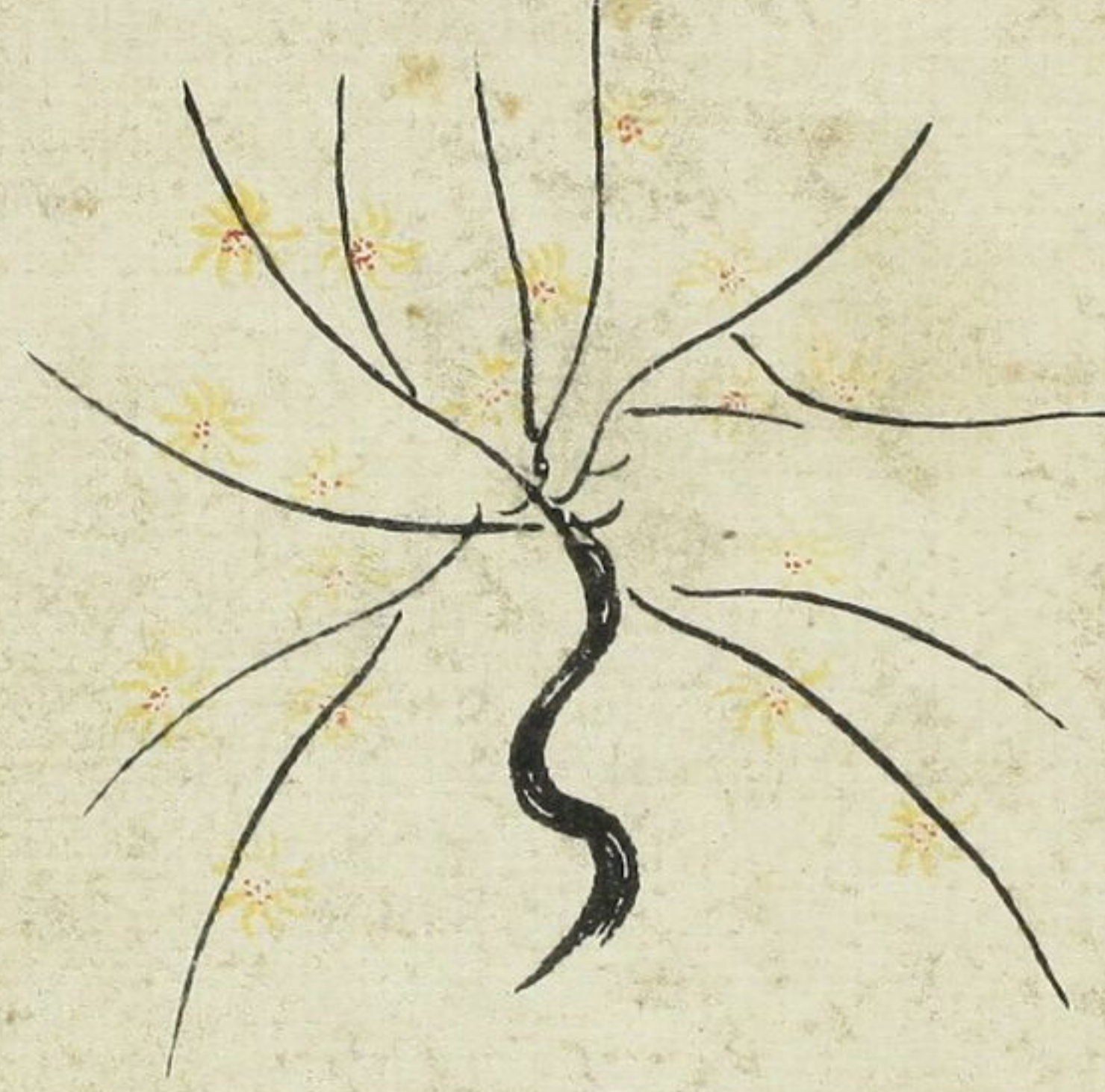


二重國籍者の詩

(林檎一つ落つ)

野口米次郎著

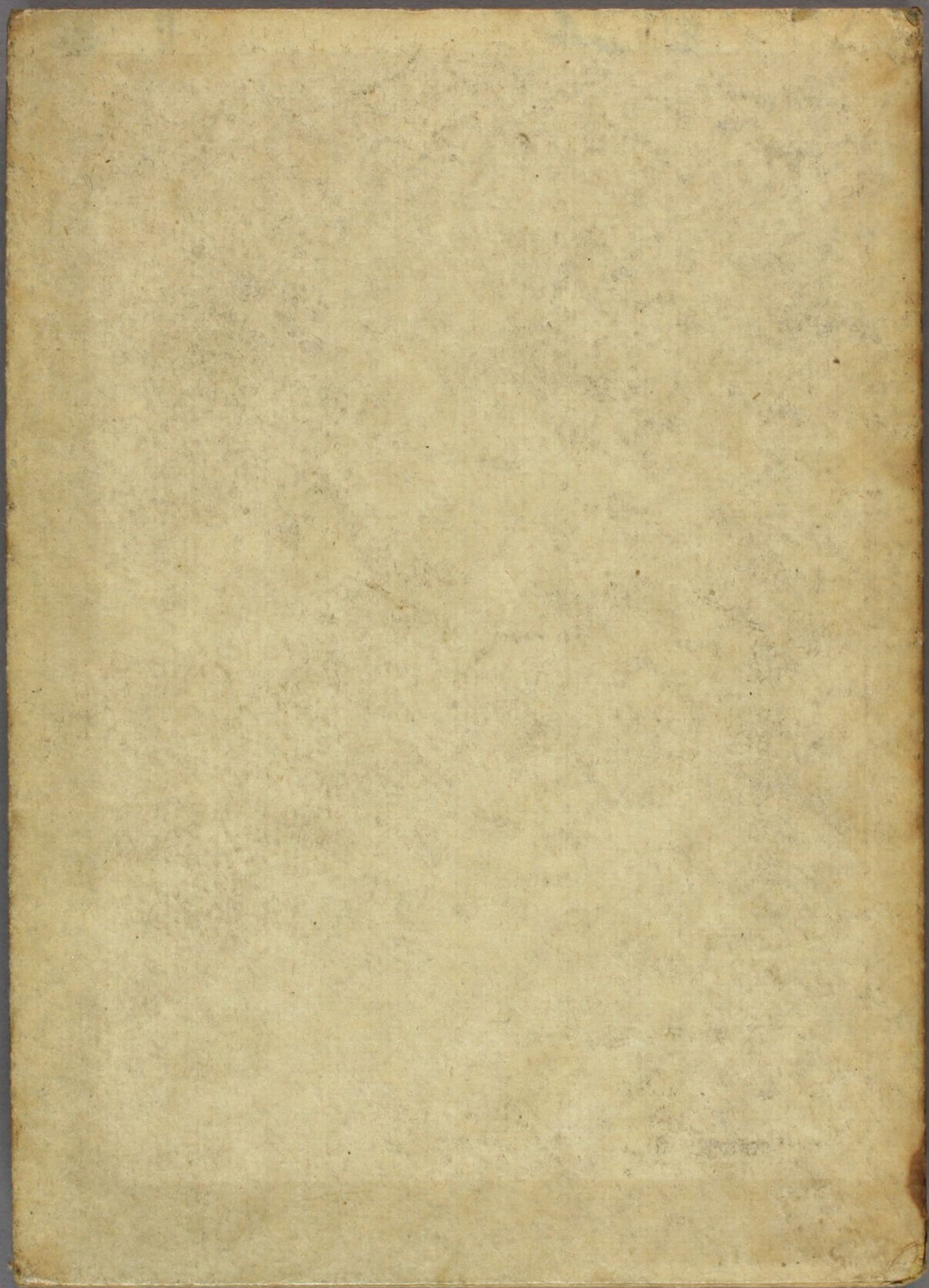


玄文社



一重國籍者の詩(林檎つ落つ)

野口米次郎著





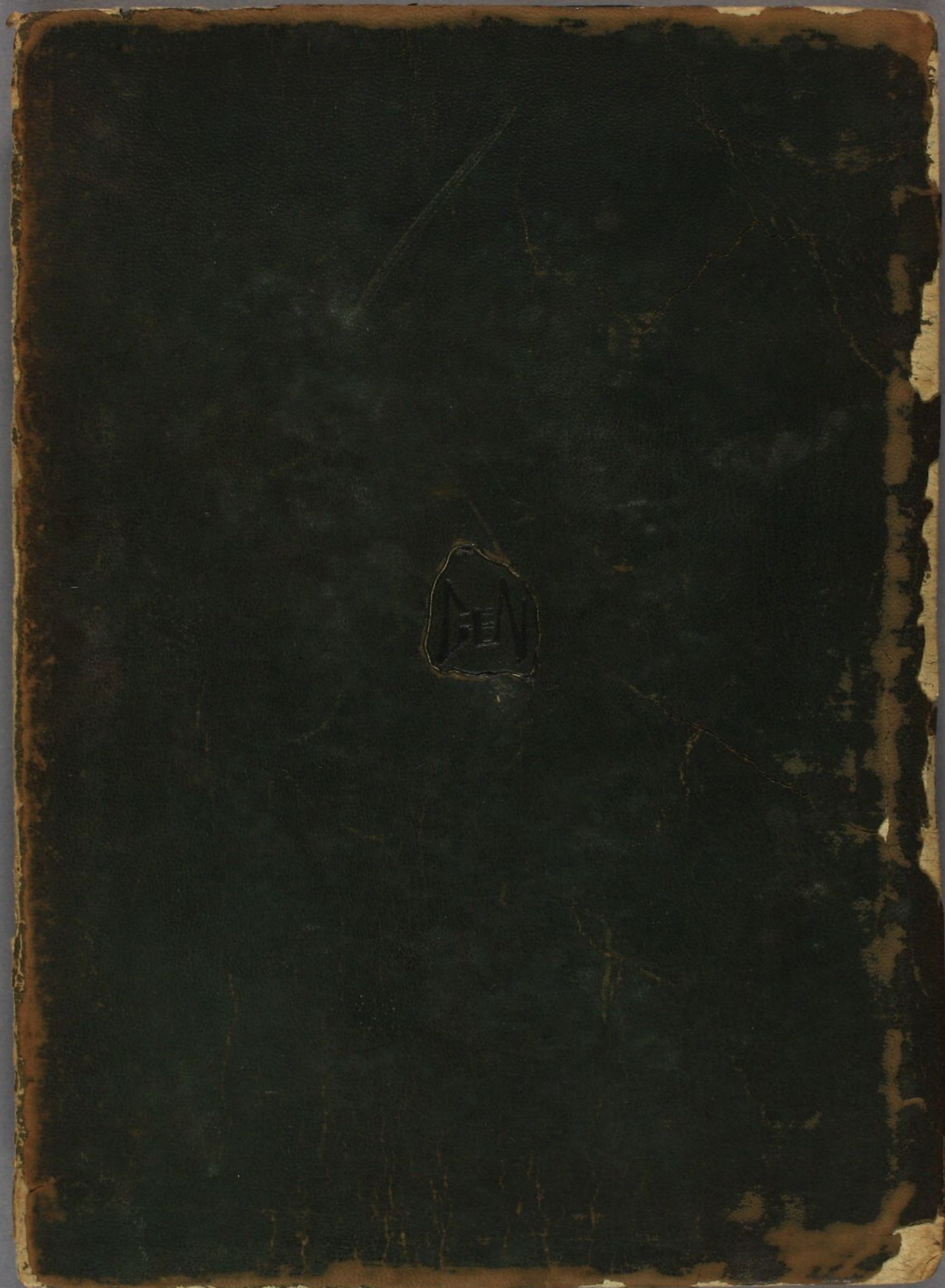
米次郎著

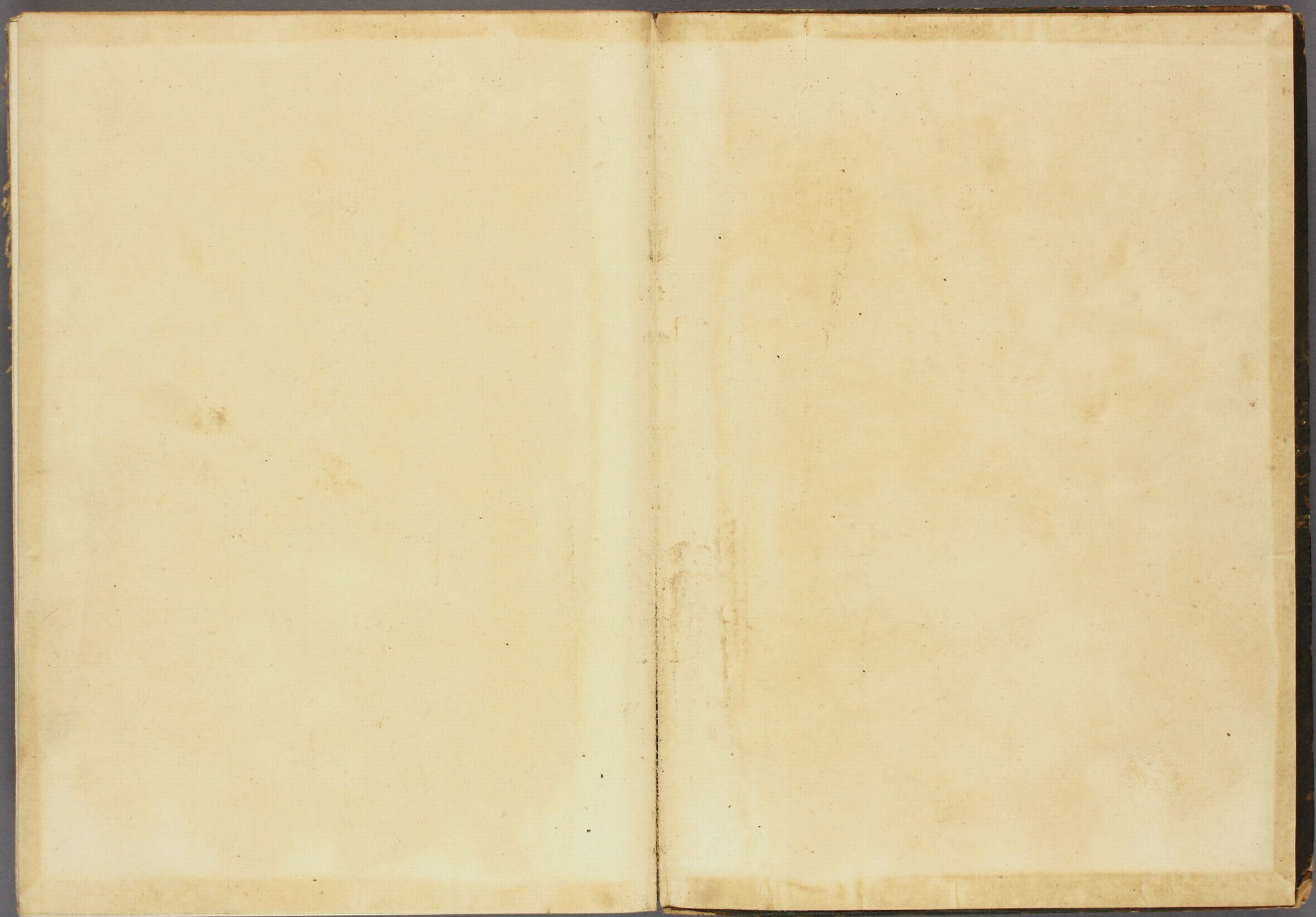
林會一

著

著二
の
神
國
漢
傳

印





詩の者籍國重二

(つ落つ一檜林)

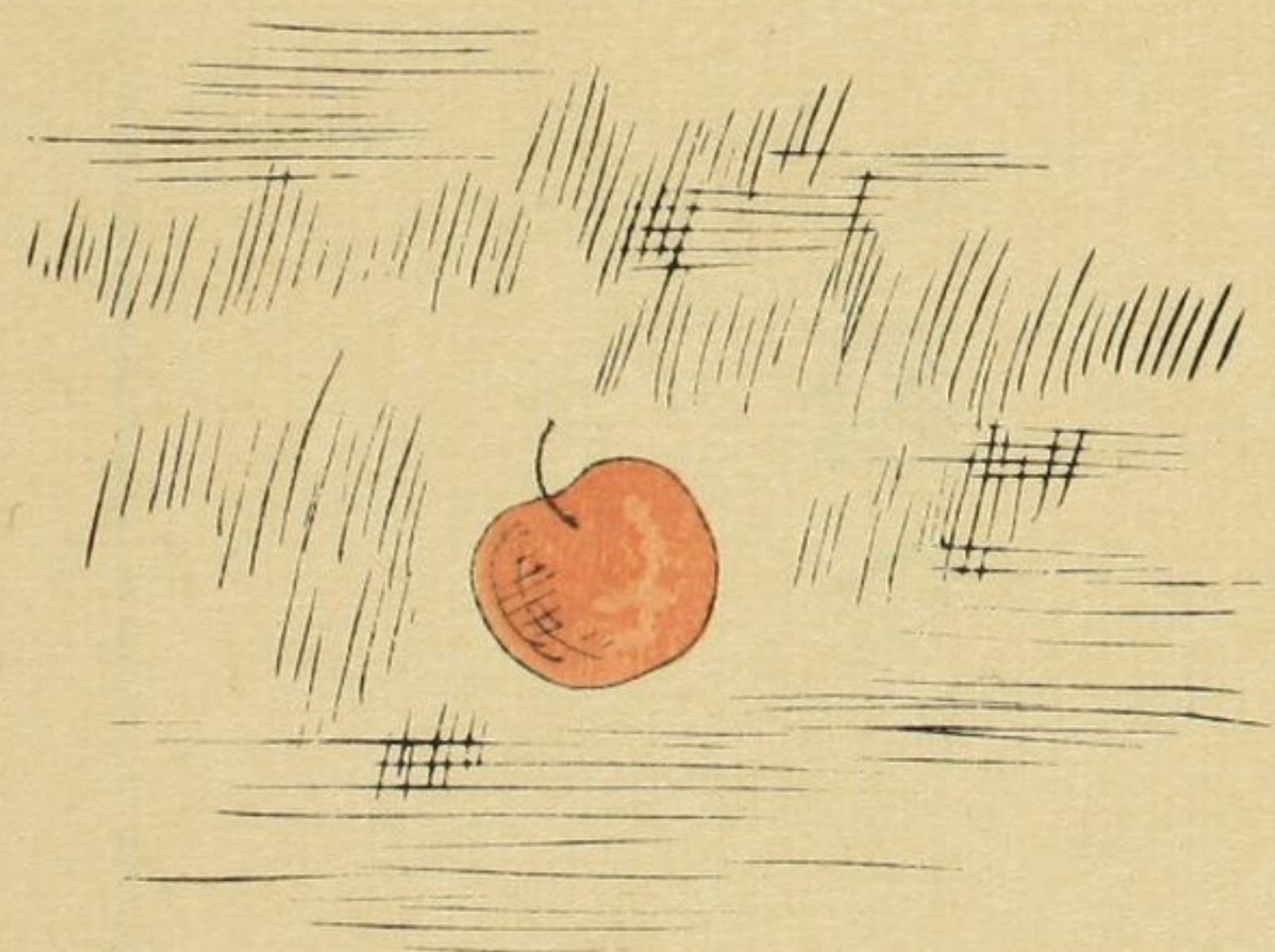
著郎次米口野



詩の者籍國重二

(つ落つ一檜林)

著郎次米口野

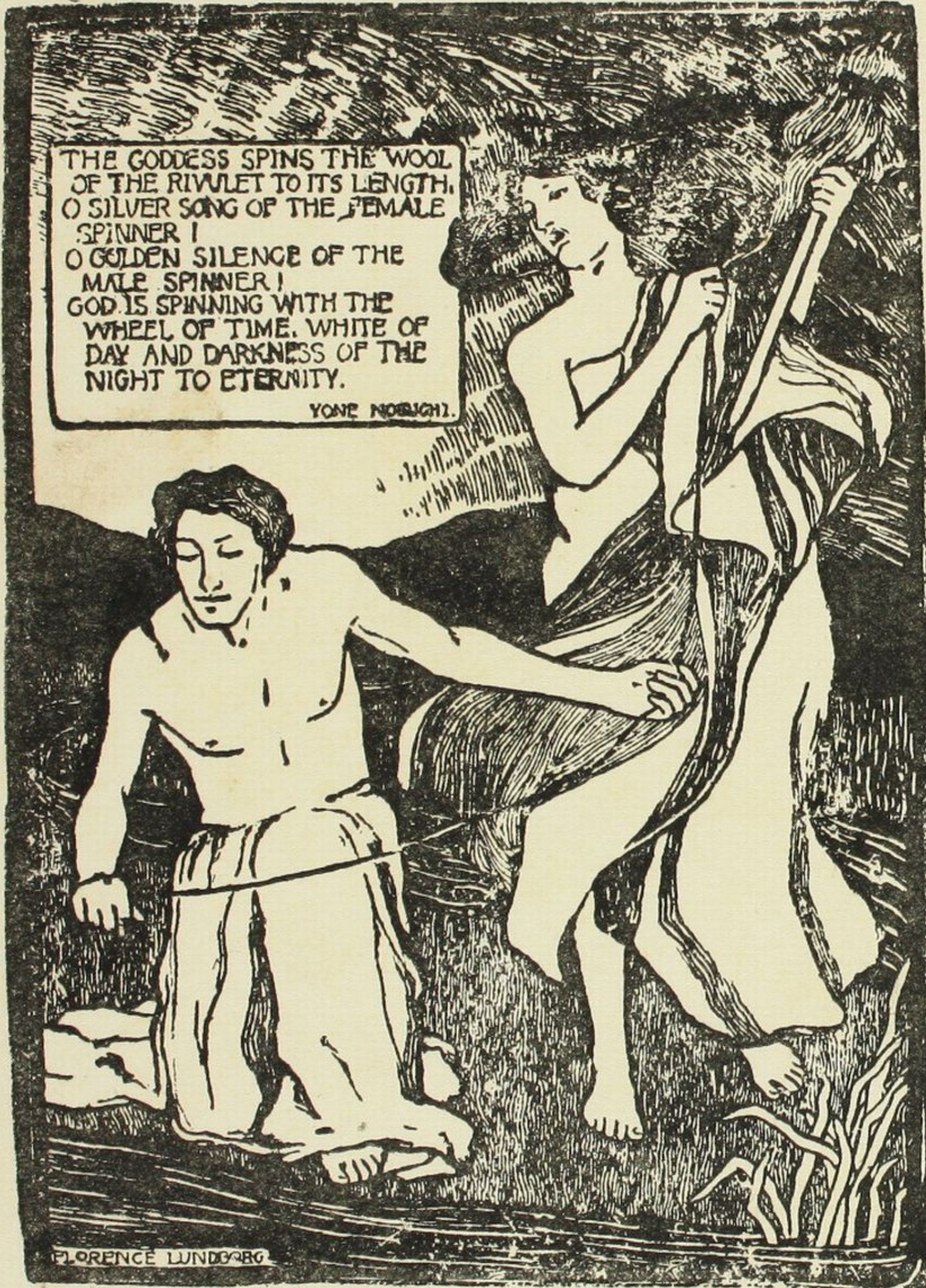


二重國籍者
の詩第二集

林檎一つ落つ

THE GODDESS SPINS THE WOOL
OF THE RIVULET TO ITS LENGTH,
O SILVER SONG OF THE FEMALE
SPINNER!
O GOLDEN SILENCE OF THE
MALE SPINNER!
GOD IS SPINNING WITH THE
WHEEL OF TIME, WHITE OF
DAY AND DARKNESS OF THE
NIGHT TO ETERNITY.

YONE NOBUSHI.



FLORENCE LUNDBORG

句佛上人に呈す

自序

『今は高潮の時なれば何か起るでせう』と私は云ひました。あらゆる聲は十分に漲つて正午の胸中へと消えました。太陽も懶惰である、地は黄金色の空気で包まれ、蝶蝶は飛び去りました。樹木は自分の影をその袖の中へ畳みました。

1

『今は高潮の時なれば何か起るでせう』と私は云ひました。小さい流れや薔薇の影は静かである。さうです、今は高潮の時なれば何か起るでせう』と私は云ひました。

林檎が一つ急に地上へ落ちました。

目次

詩

狂 想……………	一
奇異な雪片……………	三
幽 靈……………	五
鶯 へ……………	七
私は木の葉……………	一〇
向日葵……………	一三

武器は微笑と小さい扇子……………一四

詩 人……………一六

影……………一八

蓮の花……………二〇

空中の歌……………二二

思想の人……………二五

扇子を持つて……………二七

私の靈と豎琴……………二九

悲 劇……………三二

神と女神……………三三

ロバート・ブラウニングに與へる……………三四

友人スタダードに與へる……………三五

二十年後ウオキン・ミラーの山莊を見舞つて……………四〇

某哲人に與へる……………四一

彼 女……………四二

微 風……………五一

深淵の幽靈……………五二

秋の歌……………五三

夏は過行……………五五

由井濱にて……………五七

寺の鐘……………五九

蟬 へ……………六一

平 和……………六三

歌の道……………六四

私の長い悲哀……………六
 叫び聲……………六
 沈黙の鳥……………七〇
 人生が私の前に広がる……………七三
 私には質問も答案も無い……………七四
 ただ實質が問題だ……………七五
 池の面……………七六
 人生の白紙……………七七
 雀へ……………七八
 ある寺院の園庭に……………八〇
 黒い眼の一対……………八一
 私の心……………八三

瀬戸内海……………八四
 京都……………八六
 支那……………八八
 鎌倉の大佛……………九二
 蓮花崇拜……………九四
 私は太陽を崇拜する……………九六
 東の海……………九八
 偶感……………一〇一
 林中……………一〇三
 海岸の朝……………一〇五
 落日……………一〇八
 森の彼方……………一一〇

王國の火から.....	二二
夜の思想.....	二四
影の隠處.....	二六
無 題.....	二八
海の騎手.....	三〇
無 題.....	三三
キ ー ツ.....	三三
私の小さい鳥.....	三七
董.....	三九
平家を弾する人.....	三三
雨.....	三五
無 題.....	三七

蟲 の 歌.....	二九
七月の日本.....	四二
夕.....	四三
春の提燈.....	四四
躑 躅.....	四六
夢か？ 夢であらしめよ.....	四八
私は足音を聞く.....	五一
聲.....	五三
琴の彈奏者.....	五五
小猫すすちやんに.....	五六
空想の胡蝶.....	五八
夜.....	六一

春……………一六三

玩 具……………一六四

四 月……………一六六

フミちゃん……………一七二

夢……………一七四

陸に語る海の聲……………一七七

元 旦……………一七九

散 文

晨の空想……………一八三

花に對する態度……………一八六

春の思ひ出……………一九二

お菊夫人……………一九七

東洋と西洋……………二〇一

口嗜の凋落……………二〇九

日本の女の駒下駄……………二一〇

日 光……………二一七

附録ヨネ・ノグチ論 アーサー・ランソム……………二二五

装 幀 森田 恒友

口 繪 フロレンス・ランドバーク

附言。本集中「向日葵」は第一詩集「二重国籍者の詩」中の「向日葵」に數行を加へて訂正せるものである。又この詩集全體としては私の英詩「巡禮」の全部（數篇を除いて）に幾多の新作を加へたものであることを言添へます。

詩

狂 想

麥稈一束、土塊と女の髪で、

さうです、僕の家は造られませう。

ああ、世界を失つて歌一つ得たい。

雲は左の窓から飛びこみ、

形の無い苦痛と誇りの舞踊者が

潮のやうに右から踊りこむ。

僕はこれ異教徒、喜びのうちに病み、

舞踊者の足拍子に立ち上つて、

海水を變じて山巖たらしめる歌をうたいませう。

(恐れる所は、僕の歌の止む所に道徳が初まることだ。)
身を捲く襤褸一着、夢の斷片、

僕の心に夜陰の恐怖!

僕は追憶と藝術で眞赤な大空がほしう、

星を薔薇の花園に降らしたい。

さまざまな假装した木の葉と僕の靈が、ああ御覽じろ、

墓場を掘るため大地へと急ぐ!

奇異な雪片

おほ! なんとたる奇異な雪片、

ははは、面白く踊る!

ご覽、可愛い足をあんなに上げて!

死は甘い、それは確だ、

笑ひながら死に行く、

なんとたる香しい齒を見せて、ははは!

古い愛戀の消えゆく音楽のなかに

死ぬこと位奇異な最後はない!

ご覧、雪と音楽は消えゆく！

臆病者だね、ははは！

怖くて死ねない？

小さい移り気が戀しくて、ははは！

悲みを残さずに死んで仕舞ふ、ははは、

なんたる奇異な雪片よ！

私の愛人、お前は臆病者だね！

4

幽 霊

風ノ路を見るに目の邪魔をする

髪の毛の振りあげやうで、

(彼女は木が思想の枯れ葉を振るやうに髪の毛をゆすぶりました。)

おや、おや、何んだ……私は彼女をよく知つてゐます、

いつ頃からは知らないが、彼女は私の古い愛人でした。

(木の葉の死んだ思想が動きます、動きます。)

小川のやうな銀色で緩かな彼女の耳語に、

私は何んだか知らぬが忘れられない血族性の或物を聞きます。

5

『ああ、時代の幽霊、真夜中の幽霊!』と私は叫びました。
この瞬間に時計は一時を打ちました……
彼女は信仰の古い音楽を囁くやうに耳語しました。
(小川の音楽の古い信仰は流れます、流れます。)

鶯

たつた一つの歌の創造者よ、
お前は勝利、狂喜や藝術を
いつも同じな言葉で語る……何等の神祕!
私はお前より二三餘計な歌や夢を持つて居る、
(悲しいかな、私の言葉は私の命を奉じない!)
私はまだ歌はない前から慄き躊躇する。
お前の歌は突進に何等の不注意、
空中へ歌つて忘れて仕舞ふお前は豪氣だ!

順番を持つて居る他のものに考慮せず、

お前は歌ひ、お前は歌の路を推しすすめる、

(他の鳥や詩人は氣の毒だ、)

ああ、何んたる甘やかな野蠻の一切れ!

私はお前の歌の意味を學術的には知らない、

私はお前を鳥とのみ思はず詩人と受取る、

お前は韻文學の謀反者だ。

何んたる最も新しい言語の發見者よ!

人間の生命と藝術はお前の歌で亂される、

(お前の聲に何等の蕩盡があるよ、

お前の生命の何んたる感動と歡樂!)

お前は人間を變じてお前の同種族のものにする、――

單純と力の表現として仕舞ふ。

お前の歌は止み、お前は飛び去る。

ああ、お前の仕事はこんなに早く終るのか?

お前は人間にお前の歌の將來を認めたのか?

お前は暗示だ……何んたる藝術の一斷片よ!

私は木の葉

沈黙は破れる、自然へ

私の靈は帆走る、

花と鳥に遇ふため

その額に生命の歌を運んで。

孤獨に歸る時

私の心は悲しい、

愛戀の廢止に横はる

熱情の死をふり返つて。

希望と絶望にぶら下る

私は木の葉、

世界の想像と幽靈に

結びつき、震へる。

向日葵

お前は情調から破れ出る
如何に悲しく我我は經驗に執着するよ！
生に燃えるお前の各原子の奇蹟、
如何に充實してお前は生きるよ！
お前は嘗て面を寒さと影に向けようと思つたことがあるか？
熱情的な日光の生活者、
青春と誇りの表象、
お前は舞上る色の抒情詩、

聲の無いお前の歌は即ちお前の活動！
お前の生命の意義に何等の専心、
お前の自覺の驚歎、
お前の存在の大な意識！

武器は微笑と小さい扇子

武器は微笑と小さい扇子。

『左様なら、左様なら……』

鶴のやうに曲つた彼女の首

地中に心の寶玉を求めぬ。

『左様なら、左様なら……』

軽く打つ彼女の衣は雲の如く、

蝶の抒情詩を追ふ！

素足の先きに彼女の歌。

『左様なら、左様なら……』

彼女の下駄の拍節が

目に見えない愛戀の糸をもて遊ぶ。

『左様なら、左様なら……』

詩 人

薔薇は自分の美を食つてそして死ぬ。

詩人もまた自分の詩で養はれる。

自分の詩？ さうだ、瞬間に掴まれる真に自分の肉！

瞬間に掴まれる霊と肉に何等の叫びがあるよ！

現在このままの眞生命を持つた瞬間、

過去の無いお前は將來を知らない、

お前の生命は前の瞬間の死から造られたのか？

薔薇は自分の美を食つてそして死ぬ。

詩人の歌は各瞬間の死に對する葬式の吟誦だ。

死を通じ、或は生を通じて 間生活の威赫へ

彼は目覺める（彼は瞬間と生命の詩人だ）。

薔薇は自分の美を食つてそして死ぬ。

詩人の肉と靈は骨となつて自分を亡ぼし、

荒敗の灰色の上に難船した帆柱のやうに浮ぶであらう。

影

私の歌はうたはれた、併しもう一瞬間……

聲の歌は形體に過ぎない(形體は死ぬ)、

歌の眞實な部分、歌の靈は歌はれたあとに残る。

さうだ、それが君の胸の波の震動に残り、

私の歌を反響する(私の歌が投げた影だ)、

私は君の胸の竦動に遙かに眞實な白い私の靈を眺め、

君は私の靈に依つて君の塵と哀愁から高翔する。

……………春は過ぎた、

(薔薇や鳥の春は形體に過ぎない)

春が残した心の影なるもつと大な春を、

私は緑と夢に光る夏の森林に見る。

ああ、願くば世界の夏の谷間を蔽ふ春となりたい、

それは私が將來に投げ得る影、ああ私の靈の影!

蓮の花

私の胸に風の叫び、

思想は夜の記憶で黒められ、

沈黙の海をさして

私は幻の路を歩く。

祈禱より白い寂しい蓮の花が

夢のやうに脊高く、私の前に起つた、

雲間から落ちる日光で、

花は天國の憂愁を微笑んだ。

燃え盡された火のやうに、透明なその美、

各花瓣は星の歌を吟誦する、

その胸に愛戀と熱望、

私は花が朝の祝福から来たことを知つて居る。

白露の聲で花は語る、

『憂愁の門は天國の門、

入場の代價 涙のみで拂はれる、

沈黙の火はお前の靈をより白くする。』

ああ聖なる蓮花の女神よ、私は御前に跪く、
聖なる愛戀の女神、聖なる觀世音よ、
憂愁と輝く胸の女王よ、
黄金の船が私を待つて居る海岸へ導き給へ。

空中の歌

虹の如く、
すべて色で、すべて音楽で、
すべて感觸で、
影の胸の上に
彼女は卒然として立上る……
ああ、世界は一の歌と化する！
彼女は解放だ生命だ、
彼女は神經の疎動だ、

思想でも眞理でも無い。

神秘的に

彼女は藝術を(假にさういふが)

吸込み吸出す。

そして彼女が急に下へ降ると、

ああ、何んたる歌無き世界よ!

思想の人

彼には單調の時様スタイルがある、

彼の宗教に遠隔がある、

それ以上麗はしい單純がどこにあるだらうか?

神祕の道を歩む彼に

何たる壯嚴な間暇レイジュアがあるよ。

彼以上にもつと現實な、

もつと永久的な肖像がどこにあるだらうか?

彼は信仰に降服し、

彼は神祕の道を歩む——それで澤山だ、
彼は決してその理由を尋ねない。
彼は言葉以上の觸感に觸れ、
彼は沈黙の歎息を読み、
自分の靈と運命の前に祈禱する。
彼は宇宙的自覺の假名だ——
思想集中のため寂寞たる一人格だ。
彼は自然の本能に捕へられ、
焔のやうに白く燃える。
彼には道德と人生の事變が
最早存在しない、
ただ沈黙と祈禱の心があるのみだ。

扇子を以つて

扇子を持つて、日本の小さい喜びを持つて、
あなたは舞踊する。
赤と白のあなたの着物は
夢の木葉が落ちるやうに閃く。
あなたの銀の胸の香氣は
禁止の道からでものやうに歸つて来る。
仙女なるあなたの足踏は
黄金の追憶を反響する。

僕はあなたの黒い眼に
僕の充されない時代の欲望を読み、
耳語と金剛石の心を捧げて
僕は歎息の如くあなたに跪く。
日本の愛の幻想よ、
おお、僕の歸り來る追憶よ、
あなたは僕の靈の形では無いでせうか。
語れ、語れ！

私の靈と豎琴

私は豎琴^{ハープ}を草の上に横たへた、
雪は飛ぶ、
私の靈は微風と共に
遙かなる雲を追ふ。
私の靈は飛んだ、疲れた、草の上に歸つた、
豎琴は私の手の觸れるのを待つてゐた、
豎琴よ、私の愛よ、私共は互に二度と離れまい、
決して二度と！

私の豎琴よ、月の下では
私共の悲みを歌ふまい、
お前の絃と私の靈は、
御覽なさい、黄金色になつて居る。
おお、月と私の豎琴よ、私をして夜の深さに
世界と人生を忘れさせ給へ。
(彼方の果樹園では
花がただ獨り香氣を呼吸してゐる。)

悲劇

寂しい柳の影が
揺れる、
物すごく、物すごく。
道路は夕方の白髪の霧のなかに
失はれた。
遠方に不思議な青い光が
流れる、
恰も彷徨ふ妖鬼のやうに。

私は野生の叫び聲を聞く、
暗い空中に、
小河に、
星のなかに。

神と女神

女神は流れの羊毛を長く紡ぐ。
おお、紡ぐ女の銀の聲よ！
おお、紡ぐ男の黄金の沈黙よ！
神は『時』の輪で、日中の白さと夜の黒さを永遠へと紡いで居る。

本詩集の口絵はこの一篇を描けるものです。

ロバート・ブラウニングに與へる

あなたは人生のバゼントを官能で見る喫煙室の物語師、

あなたの爽快な辯舌はあなたの藝術を朦朧化させ、

また朦朧を變じて告別の辭^{バリエット}たらしめる、

あなたは奇矯な誇で裏書された田舎氣質です。

あなたは時には虚無主義からただ逃れるため群衆的であり、

あなたの大きな表現の渴^{かほ}はあなたを偉大な傳奇作者と作り、

残忍に見えるため、あなたはしばしば神祕啓示を遊戯します。

あなたは色強い冒険の大食家です、

あなたは天國と人生との間をセレネードするトロバドールです、

六絃琴^{ギタ}にあはせるあなたの愛歌に私共に肉體的苦痛さへ感ぜしめます。

あなたは現實家だが、不思議に眼を樂天主義に向けてゐます、

あなたは人情の火の上で氣儘に踊る鷲頭^{ゾウ}獅身^{レオ}の怪獸^{モンスター}です。

友人スタダードに與へる

懐しい老チャーレーよ、僕は君といろ／＼なことを語りたい——
明白に始も終もないことや、

祈禱スウエアになつたり呪言スウエアになつたりするやうな痛快なことを。

僕は君があらゆる點で僕に同意して、

遂には感激のあまり小さい千の内證事さへ洩すに至ることを知つてゐる。

『小さい内證事は嬉しいね！』と君は疲れた眉毛をつり上げていふであらう。

僕は君に椰榆つてみると想像する、君は『だつて神様がこんなに作つて仕舞つた！』と呼ぶに相違ない。

懐しいチャーレーよ、華盛頓で千八百九十九年の昔のやうに、もう一度

僕は

君と同寢臺で燃える聖火フォントの下で眠りたい。

黄金色な聖火の焔は君の躰の無邪氣な歌につれて立ち上つた。

僕の異教心は君が首に懸けたスキヤビュラーや腕に入墨した十字架を見て何んなに慄いかを今でも忘れることが出来ない。

我我は牧神ゴッドの一對で、睡眠から目覺めた時いかにも牧神らしく、生命と沈黙の古い道へ我我の口笛を響かせた。

懐しい老チャーレーよ、君は世界を嫌ふ人、有らゆる形式に於ける懶惰の達人、

常春藤の蔭から呪言する鸚鵡一羽を君に與へて、

神聖な幽居の一隅に君を祭りこめたいと僕は願つた。

僕は日本から歸つて再び君を見る時、

君を全き野蠻人とする力のある靈符を持つて來ると君に約束したてはな

かつたか。

ああ、君は今悲しい死んだ石の一塊だ、

恐らく君がいつも恐れた『筆後れ』を感じずに眠つて居るであらう。

附言、チャールス・ワールエン・スタダードは僕の親愛なる友人の一人で、英のヌ

チーブンソンや米の詩人ミラーの親友であつた。散文や詩の著者十數卷ある外、

生前は華盛頓加特力大學の英文教授であつた。十數年前死んで、その骨は加利保爾仁亞のモンタレーの加特力教徒の墓地に横たはつて居る。僕一昨年渡米の節、親しくその墓地に花輪一箇を捧げた。その日は春も目覺めかけてはゐたが、灰色の風が強かつた。

二十年後ウオキン ミラーの
山莊を見舞つて

ここは以前は彼の生きた呼吸で清められてゐました、
今ここは彼の死で一層に神聖化されてゐます。

私が彼と一緒にここで住んだ時以來もう二十年になります、——
私は低く頭をこの二十年間の思考に垂れて、

獨り小路を歩いてゐます、……

この小路で彼の影は薔薇の花弁の上に碑銘を書いてゐます。

(神の園丁なるウオキンよ、神はあなたを祝福します！)

『お前の書齋は昔のやうにお前の歸つて來るのを待つて居る、』——

この言葉は彼が私に送つた最後の手紙の最後の文字でありました。

今私はここへ歸つて來ました、……ああ、二十年の長日月が己に過ぎて
居る！

彼が『僕の倅』と呼んだ青年の私は今は澤山の髪の毛を頭から失つて居
ります、

また悲哀を喜んで語らうとして居ります。

私は夜あなたと共に空中にも地上にも

沙のやうに散らばつた星の間に眠ることをどんなに喜んだでせう、

(だれが空の星と村の燈火とを區別することが出來たでせう。)

私はそれ等の光が『そこに光あらしめよ』といふあなたの命令で顯はれ
たとさへ思ひました。

あなたは肩に熊の皮を掛け、長靴をはいた豫言者でした。

私は朝あなたと共に山に犁かれた霧の畔を登つて、

言葉を埋め、神の沈黙を掘りました。

なんたる壮大な沈黙が銀色した金門灣から流れこんだでせう、

帝王のやうな太陽がその灣を沈んでいつた時、なんたる沈黙があつたで

せう！

ウオキンよ、かかる瞬間に我我の耳は夕景の蟋蟀クリンケツトに對して開かれ、

言葉無く我我は徘徊して、空中に懸つた大きな提燈を見て微笑しました。

42

ウオキンよ、私はあなたがあなたの愛するこの高丘ハイヒルで眠つて居られるこ
とを喜びます、

春になると、紫色の空気のなかから毛茛ペニクランや罌粟ポピーが笑ひの歌を振りこぼし、

冬になると、幽霊の軍隊のやうに霧がこの山を占領して仕舞ふ、――

その時あなたは墓場から動き出して霧に乗りまたがり、

あなたの詩『コロンプス』の言葉、『帆走れよ、帆走れよ』を叫ばれるで
せう。

あなたは生命の日に於てのやうに、死の世界に於ても生と歌の偉人であ
りませう。

43

ウオキンよ、私は空虚な涙の歌をうたはんが爲めここへ来たのではありません、

私は人生の戦闘から戦闘へ移る間の一休憩を得るために来ました。

私はあなたが幾年も幾年も死んで居られるとは考へられません。

私はだれかの聲を聞くやうに感じます、『ウオキンは酒一壺と

羊肉一塊買ひに町へ出掛けた。待つてゐ給へ、ぢきに歸つて來るだらうから……』

よろしい！ それでは香ばしい夕景の空氣に頭と足とを横たへて、

私は彼の歸へるのを待ちませう、『おおヨネよ、二十年たつて……』と叫びながら輝く彼の顔を待ちませう。

某哲人に與へる

鳥と花が歌ひのこしたものを

あなたはとつて以て自分の歌とするでせう。――

あなたの諧音は生れたもの、作られたものでない。

藝術の叛逆を見ずに歌を持つといふことは尊い、

人生をして單純な力を得せしめるといふことは尊い、

(そのこと自身が尊い創造です)

理智の厭制から忘れられるといふことは尊い。

あなたはミニエトやシャンソンや空想に止れと命ずる。

酒宴や假装に閉ちよと命ずる。

あなたは高い座席から下りて、

粗末な着物と言葉の庶民のなかに坐る。

單純のなかにあなたは自分の解放を求めた。

眞實なる自己を確にするといふことは尊い。

現實のないところに眞實の想像がある理由がない、――

人生を平易に見るといふことが

發見であり感動である。

46

私はあなたのなかに人生と世界の問題を讀みます、

涙と喜びの撚り合せを、

空間の深さ、時間の廣濶を、

完全な宇宙の廻轉を。

私はあなたの中に偶然に對する人間の避くべからざる服従を讀みます、

急迫の場合を變じて歌とする眞實なる知識を讀みます。

音律の變化はただ急迫そのものから得られる、

眞實なる感情と均齊が

法則の嚴守を我我に迫る。

47

あなたの歌は時と場所の上に浮き出る、

不滅とか時好とかに煩はされない生命の心理状態――

眞實なる觸感――

驚異――

あなたの歌はあなた自身である以外に何物でもない。

私は忙しい風の足が

人情と法則を暗示しながら過ぎるのを見ます、

風は熱情が横はつて居る陰影へと急ぐのです。

おお風よ、私はお前と共により良い生命と歌を築くであらうか。

あなたは夢と希望から生れた一光明、

生の戦慄を歌ふ人、

あなたの瞑想の魔法、

あなたの歌の妖術をして、

沈黙沙漠の上に遊戯させてください。

彼女

彼女は秋の噉り泣を集め、

生命と告別する瞬間に於てのやうに

彼女の目は憂愁のあらゆる姿に開いた、

彼女の一生は黒い十二月の一夜であつた。

彼女は産れる以前已に涙の言葉を學び、

彼女の光る悲しい聲は

深夜の星の聲のやうであつた。

疲れた薔薇の上に落ちる言葉なき月光のやうに、

暗黒が不思議に彼女の思想を包んだ。
彼女の顔は雲のやうに懸る數千の夢から
一つの最も悲しい夢を選ぶに苦んだ。
彼女は光で見捨てられた夜の陸土——
死の叫びを反響し
灰色の幻が流浪する窪地を歩いた。
男子の談話以上に
彼女に恐しいものは無く、彼女は
冬の暴風雨からのやうにそれから逃げた。
彼女は夏の夜風が黄金の胸に消えるやうに
死ぬことを喜んだ。

微風

微風は知らない間に來て
僕の腕の下で歌ふ。
微風が急に止ると
僕もその靈のさすらひの歌を止めませう。
微風は美のやうに來る、
僕の腕の下で微笑みつ、微笑みつ。
微風は僕を見上げていふ、

『薔薇の下で鳥と人間から隠れやうか。』

微風は憂鬱の胸をだいて来る、

僕の腕の下で歎息しつ、歎息しつ。

僕は黄金の生命を物語り、

僕は微風と一緒に太陽の宮殿へ飛ぶ。

深淵の幽霊

雨が落ちる時僕の夢は上る。急な歌が

六月の雲のやうに僕の耳に波立つ、

風の胸より軽やかな足音が

僕の夢で燃ゆる眼の前で高く低く足拍子する。

『僕是谁だ？』と僕はいつた。聲は答へた、

『深淵^{アビス}の幽霊だ、

夜暗の上に空虚な石を積み、

火のやうにあらあらしく踊り、遂には消える。』

54

秋の歌

鳥の風の黄金の幻想が歌の銀波の上に揺ぐ、
最も古い歌が夢の秋の胸に再び起る。

幽霊的な光榮の城が時の悲しい魔法で造られる、
哀愁の最後の笑ひと木の葉の赤い暴風雨とで。

私の小さい靈は歌ふ曙の露から産れ、
生命と談話の大な海に告別する。

55

夏は過行く

熱情の光が飲みほされた空しき酒杯——
今日、悲しき風聞が木の間を過ぎる、
冷やかな風が河で運ばれる、
彼は哀愁に震へる、
長くて暑い蟬の歌は今は何處？

56

由井濱にて

宿無き海へ私は目覺めた。
おお、風と重吹しんきの私の胸！
私は今日非人間となつて
海の心の笑ひと踊りを見るを喜ぶ。

57

海と風の歌を抄ひ上げ、
私の憧憬の胸へ投げ入れよ！
私は水と空氣の一族と共になりたい。

おお、海の靈と波動の私の靈！

海と胸の驚異に捲き込まれよ——

海の靈と光る私の喜び！

風と海のすべての光明を集め、

最も黒き夜に對する防禦をせよ。

寺の鐘

千年の時代に震へつ、

信仰のやうに暗く、

鐘は私を探しまはつて號泣する、

(私は信仰を無くしてから長いことだ、)

嘲笑して沈黙をよぢ上り、

必ずしも不親切でないが重も重もしく、

殿堂と夜の暗さから

暗き私 胸の中へ、——

都會の歌がうたはれて言葉無く、
思想に疲れ灰色な私の胸の中へ。
私の胸は鐘の號泣に答へる、
悲哀と信仰に胸鈍く、
私の記憶は塵を忘れて。
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛！

蟬へ

古い靈の急な痛み、――
涙即ち聲、聲即ち涙！
お前は胸の破れになんたる忘れ難き悲劇を語る！
ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミン、ミン、

火の胸した森林の歌ひ手、
お前は世界に向つて呼ぶのか、それとも私の愛戀と生命に向つてか？
お前の聲の單調は私の歌の悲劇であるか？

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミンミン、、、、、

生命の悲みを讀む靈はお前の胸を知つて居る。

世界や人生が死の勝利を得るまで叫べ、

我我に信仰の悲劇に依つて死を贏ち得せしめよ！

おお、悲しい信仰とたつた一つの歌ひ手、――

命と涙の古い夢を泣きつくせ！

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミンミンミンミン、、、、、

平 和

夜の無終のだるい旋轉！ 影のやうな平和が世界を包む、愛戀と夢が無

限のうちに眠る。

豊かな狂想の新しく生れた世界！ 陸と海と月と人間がその胸に朦朧を

巻く。

ああ、世界は母なる孤獨と休憩する、その羽翼のしたで星と日分は沈黙

の説教を聞いて居る。

歌の道

歌の道は静かな暗明だ、
蘆の歎息に乗つて来る、
彼女の家は風の胸のなかにある。
眼に見えざる仙女よ、雨の憧憬がお前にある、
灰色で悲しい雨のさまよふ幽霊よ、
光の狂喜を持つた言葉なき幽霊よ、
後から人を驚かせるのがお前の喜びだ、
星への神祕を尋ねる胡蝶よ、

雲のお城を徘徊する鳥よ、
お前を支配する力は私に無い、
併し一日の暗明のうち
ここ暗明の場所で、
私はお前の驚異の姿にあこがれて坐つて居る。
おお、千の顔と思想を持つた精霊よ、
私をして再び古い歌のなかに住ましめよ。

私の長い悲哀

小河はイデンの樹蔭の隅へと急ぐ、
その銀の歩みは月へと向ふ私の愛人の歩みだ。

おお、長い小河よ！

おお、長い私の悲哀よ！

66

微風は揺れる柳の下に消える、
その黄な笑ひは白百合の路を歩く私の愛人の笑ひだ。
おお、長い柳の動搖よ！

おお、私の長い悲哀よ！

燕は太陽の心の中へと高翔する、

その方法は私のあらゆる胸に打勝たんとする私の愛人の方法だ。

おお、長い燕の高翔よ！

おお、私の長い悲哀よ！

67

私の涙は下を眺める薔薇に落ちる、
薔薇の呼吸は、半ばの愛戀でまた半ばの嘲弄である私の愛人の呼吸だ。
おお、薔薇の長い沈黙よ！
おお、私の長い悲哀よ！

叫び聲

朝太陽はすでに叫び聲を聞く——
西の胸のなから来る呼ぶ聲を。
私の鳥よ、お前は遙かなる巢から来る呼ぶ聲を聞きつつ、
家路を急ぐのか？

私の柔和な靈よ、花の咲くしばしの間、
留まり、歌をうたへ、……
お前は幽界への路から来る呼ぶ聲を聞くのか？

花と春は間もなく死ぬであらう、……
お前は彼等と共に旅しようとするのか、私の愛人、私の靈よ、
だが、しばしのあひだ留まれ？

沈黙の鳥

世界や風が作られた以前に生れた沈黙の鳥よ、
愛や涙より年老いて、
笑ひと人生から離れた寂しい幽霊よ、
私はお前を歓迎する、
思想と星の空から飛びくたれ、
神祕のやうに白く、遠さかつて、
人情や聲に厭きた沈黙の鳥よ、
神祕の兄弟よ、

お前と共に、ああ沈黙の鳥よ、
私は時間と悲哀が死んで横はる海の彼方へ帆走りたい、
ああ、沈黙の鳥よ、永遠と空間の住者よ、
私をして曙光ドクンの生れた以前の思想に生かしめよ、
私は聲無き柳の小枝の如く言葉を失つた、
（柳の戦慄はその黄金の歌だ）、
私は言葉無き蓮の花の如く聲を失つた、
（蓮花の杯の破れは
空中の踊りを呼ぶ急な悲鳴だ）、
ああ沈黙の鳥よ、
私は永久にお前を歓迎する。

人生が私の前に広がる

人生が私の前に広がる、

広がるにつれて、私の詩が私から遠ざかつて小さくなる、

それでも私でも詩との結合を不浄にする距離の感覚は無かつた。

嬉しい戦慄が私の肉體のなかに走つた。

人生が私の前に広がる、

広がるにつれて、私の詩が太陽で輝き愛戀で輝く柔和な歌の延長を横切

つて一層明瞭に見える、――

その微笑、その眼、

甘やかなその實在の身振り、

その毛髪の精神的優美さ！

人生が私の前に広がる、

広がるにつれて、私の詩が柳の小枝のやうに揺れる。

私には質問も答案も無し

私には質問も答案も無い、

私には人が私に豫想するやうな表現の用意が無い。

星が煌き、花が咲き、南の風が吹く……それで十分だ。

空虚を語り給ふな、瑣事を語り給ふな、第一、君の詩論を語り給ふな、

君が書くところは仙女を見切物にする以上何物でもない、

君は滑稽家だ、私は君の爲めに愕された。

私と共に薔薇が咲く私の花園へ來給へ、

薔薇も君のやうに詩を書くとき君は思ひ給ふか。

ただ實質が問題だ

ただ實質が問題だ。

感觸、呼吸、暗示……この外なにを君要求しますか。

僕を子供ぢみてると呼びたければ君の勝手だ、

併し僕は決して子供でないと思ふ。

僕の藝術は支那や埃及よりもつと年取つて居る、

知識も概念も僕を欺くことが出来ない、

僕は薔薇の一小花瓣にさへ全宇宙を運びこむ風の外何物でもない。

池の面

私は私の感情を静めてゐたい、
愚な断片に破れて仕舞はないやう私の言葉を防護したい、
私は私の粗野な主張を忘れない、
故意に語つて私の秘密を疲れさせたり傷つけたりしたくなう。
私が聞く外部の歌の突發は私を失望させ又冷固させる。
私の官能は冷される時に生氣を附與される。
私は自然に面して、自然を眺める、
私は池の面に飛ぶ木の葉の響を耳に聞く。

人生の白紙

人には凡て人生の白紙を埋める夢が無くてはならない。
石の燈籠が如何に空間を満たすかを知らないとする、園庭に價はない。
木が影で地面を色取る藝術を持たぬとする、木は何物でも無い。
私の詩はただ白紙に過ぎないが、私の友人は隨意に来てその白紙に自分
の夢を發見する、
もし私に藝術があるとすると、それは私の友人を恍惚に目覺めさせる喚
起の聲に外ならない。

雀へ

一幽霊、

影と静止のなかから再び踊り出たもの、

前世の追憶と色彩をあさる獵人、

お前はここに同じ人情と同じ夢を見出すことが出来るだらうか？

お前は各瞬間に献身せるもの、

生きる力の把持者、

お前の一瞬間は人間の十年にも比較されやう、

瞬間はお前を咬かし慰め驚かすだらうか？

お前は神経の幽霊、

お前の聲が呪詛ならば、

お前はすゝての心を以て呪詛する、

又それが後悔ならば、

お前はすべての體をなげて後悔する。

ああ、僕もお前同様に同じ感動を味ひたいものだ！

ある寺院の園庭に

あなたの港に避難して居る私は海に訶まなまれた小舟であります。
私はあなたの呼吸のしたに私の體と帆とを横たへます。
私を憐んだあなた、私を迎へてくださったあなたに、
ああ、なんたる佛陀の香氣があるでせう！
ここには空氣が紫色の霧で祈禱を積んで居ります。
ああ、私もあなたの祈禱の心に結びつかしてください！
私に觸れて、私の海に傷ついた胸を癒してください、
祝福されたあなたの手は涅槃の手に外なりません。

黒い眼の一對

私は部屋へはいつて、
奇異な感激やら好奇心やら憧憬やらを感じた。
私はそこから逃げたいと願つた以前に、
北方の星のやうに惶く黒い眼の一對を見たと思つた。
彼女の美妙的な口元、
頬には接吻された時のやうに麗はしい印がついてゐた。
首は白の象牙色であつた。
『あなたに何處かで御目にかかりましたね』と問ふてみた。

『想像にもてあそばされてはいけません』といふ聲がしたと思つた、……
『私は暗黒の外何物でもありません、ただもう十分時も滞在するだけの生
命です。』

私の心

あれは私の火の心の反照でせうか？
あれは西方の空を閃めかす日没でせうか？
あれは私の不安の心の反響でせうか？
あれは沙上に破れる海の叫びでせうか？
あれは私の悲み多き心の聲でせうか？
あれは闇の路を求める風の歎きでせうか？
あれは落ちる私の心の涙でせうか？
あれは天から悲劇を運ぶ雨でせうか？

瀬戸内海

ここには遙かなる望を持った酒の水、

ここには親くてしかも忘れられた紫色の煌を持った四月の微風、

おお、ここには瀬戸内海の薄明、

私は言葉のない歌を聞く、

それは私の飛ぶ心の歌、

私は千年も以前に夢見た私の夢の歌、

おお、私の仙女の世界の夢、おお、内海の美はしさ！

(水夫がうたふ人生の歌を聞け、私の心よ、)

私は私を迎ひた島を後にして帆走る、

(私の心よ、告別する島の聲を聞け、)

私は歌うたふ空へと帆走る。

おお、白い心の鳥よ、白い愛戀で私の心を舵取れ、

ここは私の夢の海、おお、ここには瀬戸内海の美はしさが流れる！

京 都

霧から生れた京都は香と祈禱の都、

半ば消えゆく夢のやうにためらふ。

忘れられた塔から響く鐘の古い歌は

鴨川の歌の暗明に合する。

娘達は半ばの耳語と半ばの愛戀、

踏迷つた月光のやうに老いて、

神様が築いた町に羽撃き、

春と熱情をかるがると運ぶ。

『暫時お止りなさい』と私はいつた。

娘達はお白粉つけた首をまげた、……ああ、麗はしい！

『いえ、難有う、またの日に』と彼等は答へた。

おお、彼等の薔薇の呼吸のやうな微笑！

支那

古い色して堯舜時代を暗示するお茶を茶椀にそそぎ、
孔子の國を夢見やう。

(空な茶椀になんたる絶望の眺があるだらうよ。)

古金色した月が下を見詰めてゐる。

支那の月よ、あなたは智慧と詩には厭きてゐませう、

あなたの顔は秋の顔、柔かい歎息よりもなほ柔かで、

甘やかな死よりなほ甘やかな忘却^{フツビヨク}がある。

永久自由な阿片の黄な臭氣に、

狂喜と忘れられた愛戀の耳語をお聞きなさい。

ここ阿片の私室では時の牙も力が無く、

罪は空想の佳快な胸に眠つて居る。

倒れた塔のやうに體を横たへた阿片吸ひを御覽なさい。

全き心を擧げて白色の睡眠に質入れして居ります。

ああ、あれは吹き來る叛逆の叫でせうか。

否な、長い煙管を啣へた大官が、

木の葉のやうに急ぐ奴隸を従へ、

千の旗や大鼓や笛で、

大道せましと練つてゆく。

ああ、私はもう一度

遠くの歌のやうに力の無い支那の美人が

蝶蝶の羽の肩をゆすぶり乍ら、

潮と集る群衆の歎美の眼で送られる有様を見たいものだ。

古い色して堯舜時代を暗示するお茶を茶椀にそそぎ、

孔子の國を夢見やう。

(空な茶椀になんたる絶望の眺があるだらうよ。)

ああ、私はもう一度

森林の心のやうに寂しい支那の音楽を聞きたいものだ。

私は愛戀と未來をさして吹き去る

冬の風のやうに叫ぶであらう。

鎌倉の大佛

灰と痛みに歸した古い歌の上で、

(その歌の下で死が歎息の霧で偶像や樹木を包んで居る、)

大佛は永久に坐つて居る、

その心は静寂に強められて。

おお、無言と勝利の清淨さよ！

時には祈禱の白衣を着た巡禮者が、

影の聲に呼ばれて夢を吟誦しつつ、

海の悲哀を飛ぶ燕のやうにここに顯はれる。

おお、人間の心に信仰の廢墟を攪きたてる幽靈よ！

世界と人情を全く失はれたものとするな、

數世紀の歎息から偶像と歌とを救ひだせ、

再び地上の祈禱に光明の殿堂を建設せよ、

涅槃の空と信仰の慄きを持つた世界は何處にあるだらうか。

地上には大佛と私自身の青白い影、——

月は恐しい樹木と黄昏の灰色のなかに揺れる、

偶像と月と共に私は頭を垂れて歩く、——

三人は共に無終と静寂の恍惚に入った。

蓮花崇拜

谷から山から崇拜者が忍び寄る、
白い心に白い着物きて。

彼等は聖なる池のまはりに坐る、池はこれ蓮花の住家、

彼等の指は合せられる、恰も女僧のやうに

水と薄明を劈く言葉なき蓮花の蕾。

彼等は祈る（沈黙の祈禱は言葉のそれより更に尊い）。

星や夜は俄にその歌を止め、

空氣と鳥は動き始める。

おお、復活よ世界と人生の復活よ！

見よ太 は上る、蓮の蕾は

『南無阿彌陀佛』一つを吟誦して

ぱつと破れた、輝いた。

星は落ちた、否な星は開いた蓮の心のなかに落ちた。

星は眞實な心に落ちるであらう、

又日光の路は祈禱の路に外ならない、といふことを知つて、

崇拜者は静な足を家路へと、

また極樂浄土の方へと向けた。

彼等の歌は太陽の祝福に黄金と輝き、

森林を添つて聖なる御名を吟誦した。

私は太陽を崇拜する

私は太陽を崇拜する、

それは光線のためでなく、太陽が地上に描く樹木の影のために。

おお、天女の住家のやうに喜び迎ふべき影よ、

私はそこで夏の日の夢を築く。

愛戀のためでなく、愛戀の記憶のために、

私は女を禮拜する。

愛戀は死ぬかも知れない、だが記憶は永久に青い、――

春の狂喜を汲む泉だ。

私は鳥の歌に謹聽する。

それは聲のためでなく、聲に従つて来る沈黙のために。

おお、聲の胸から生れる新鮮な沈黙よ、

死の國の諧音よ、私の顔はいつもその方を向いて居る。

東の海

私は西の都會に告別して、

東の海へ歸りませう、――

いつも太陽が第一に接吻する私の島へ歸りませう。

私は私の甘い郷里へ行きませう。

そして憂愁を山の胸の上に横たへて、

私のすべての歌を鳥に與へ、そして長く眠りませう。

風が森を動かすかも知れない、私が目覚めるかも知れない、

私は人生の喜びを空の雲へ口笛吹きませう。

そこでは雲の生命は私の生命でありませう。

私の愛人はどんなに背高く延びたであらうよ！

彼女は以前私より二寸も低かつた。

月の提燈が藤の花の間に點される時、

私と私の愛人はそつと忍んで

平和のやうに垂れる垂れた藤の花で背の丈を測りませう。

彼女が勝つたならば、私は彼女に七の接吻を拂ひませう、

私が勝つたならば彼女から七の接吻を受取りませう。

どの道接吻は私のものとなりませう。

それから私等は聖人や詩人の偶像の側を歩いて、

人生はただ愛戀である一義を誓ひませう。

愛戀と菊一株で私は永遠に生きませう。

偶 感

……私はお前を空想して

不死のロマンスだと思ひ、

盡きざる時と歌の美だと宣言しました。

お前は私を時世後れだと哄笑して、

意見をちと變へたがよからうと助言しました。

お前は決してロマンスや無終を口にしたことが無い。

お前の生命(私はその意味をはつきり知らなかつた)は
光をすぎる水や雲の生命だとお前は云ひ、

變化は滅亡でなく飛躍であると語る。

お前は消失してゆく時間を辯疏するものだと言ひ、

『人生！ 人生ただ人生のみ』と叫んだ。

ああ、お前の聲は眞實と解放への應答であらう、

お前の濟度は心の音樂の整調から得られるであらう、

お前は所謂文學をすつとの昔に捨てて仕舞つたといつて居る。

私がお前を古い詩の一冊だと思つてゐたなどを考へると

私はなんたる愚物であつたでせう。

林 中

林中に居ると私は最早や野蠻人でない、

皮肉の苛立ちも私の所有物でない。

今日風と共にさまよふといふことはかなりの奇蹟だ、

私の詩の心よ、お前は飛びたいだらうが、暫時とどまれ。

私と鳥が相互に傳記者たることは幸ひだ、

我等は互の歴史を讀む。

おお、枯れた花から星が生れるといふ神話的現實よ、
若し私が死んだならば、熱烈の花、椿の一枝を尋ね給へ！

海岸の朝

(私は夢見た)恐しい見物の苛責で苦められ、
血走つた眼は無益に星の祝福を見詰めたために
痲痺し盡し、
漸く自分は眞黒な地獄から這ひ出た、――
東雲の微風のなかに、
私は長らく忘れてゐた微風の味を嘗め、
生命の俄かな戦きを感じて私は震へた、私は震へた。
朝と不滅の青い香氣が

徐徐と私の靈を甦らさせた。
奈落の苦悶者の吐く呼吸で
無慈悲に觸れられ、
黒い汚點しみで汚された私の顔位
見るに恐しいものは無かつたでせう。

私は東方に顔を向け、
恰も遠方の水溜を嗅く家畜のやうに、
朝日の登るのを嗅いた。
光榮の轟をうたつて海から上る
光と愛の女神の接吻——
復活の黄金の歌を私は迎へた。

白い光輝を放つて太陽をまはつて踊る二人の天女、
一人の天女は『喜悅』、深紅の着物に、
眼から銀色の光明、
雲のやうな髪の毛に花を挿す。
他の一人は黒衣を纏つた『信仰』、
言葉なき額イフキニチに無限無限の唇。
私の頬は俄に赤く香ばしく花咲いた、
私の眼は古い喜びの夢で輝いた。
笑ひと愛の朝露は
太陽に接吻された私の愛を豊かに飾つた。

落日

太陽は林中にすつと低い……

風で吹きさらされた私の心の反射では無からうか。

太陽と枯葉の心の火焰、

それ等の心は最後の歌と美に燃える、

人生の疲労と最後の感激に燃える。

太陽の言葉無く落ちる光線は私の心に懸けられてゐる一幅の繪畫を照らす、――

その繪畫はむかしむかし私の愛人が描いたもの。

落ちる日の光線のしたで、私は彼女が涙の藝術で秘め置いた秘密をたどる。

私は彼女がブラシユを握つた時彼女の指が如何に輝いたかを良記憶して居る。

今や落ちる木の葉を太陽の美は暗明のうちに消えゆく、

また私の心の繪畫は歎息の廣野のなかに。

森の彼方

はるかなる森の彼方に私の愛人が住む。
彼女の胸に鶯の巢が宿り、
髪のかなかに愛と夢を隠す、
日に九度も彼女は顔を溪流にうつす。
彼女と牡丹の花は私と空の雲を見て微笑する、
私は絲遊と罌粟の花を履んで
彼女の安否を尋ねんとする。
縦の木の影は彼女の腕の影、

その影のしたで私は愛と春をうたふ。
彼女は樂器を取つて絲を打つ、
彼女の白い聲は白鶴の聲だ。
星と微風の住居から首をのばして、
私に長い流盼を與へる、
恰も櫻の花が西方の谷を眺めるやうに。
甘やかなる愛人よ、
私はお前と共に住み、
無終から盡きない笑ひを紡ぎたい。

王國の火から

朝露と燃える希望の女王、

伊邪那美神、

愛と霧の浮橋から

光榮の最初の歌を風へ帆走らした日のことをいつも考へる。

どんなに高く太陽や月や

木や河が悌友の喜びに飛んだであらう！

子供等よ、王國の火から、

人情の廢墟と負傷から、

お前等の笑ひが山嶽を慄かせる所、

波が星の音樂に踊る所へ來れ。

希望の破れ愛戀の塵を忘れよ……

如何に愛戀より更に懐しく雑草の戦慄があるよ、

如何に價値少く人間の希望が鳥の囀りよりあるよ。

夜の思想

隣りのお寺の門はもはや閉された。

私は線香と夜を嗅ぐ、

私は祈禱の寂しい響を聞く。

燈火は燃える、机上の時計は鳴る。

外には風と幽霊が早足に過ぎる。

なんたる不思議と寂寥が今夜私の部屋にあるよ。

私は青白い灰に歸した火の側に坐る。

私はその灰の下に私の夜の思想を埋める、……

夜の沈黙が集つて来る。

豫言者よ、夜の沈黙に歌を與へよ！

私は寂しい不思議な部屋をあちこちと歩むで居る、……

おお、遠方にある私の友人よ、

私は急に月と薔薇のことを考へる……

なんたる不思議と寂寞が今夜私の部屋にあるよ！

影の隠處

もろもろの偶像に面接して、

再び私は影の隠處に起つ。

ここで沈黙は暗黒より更に年老い、

光はさまよひ、幽霊と化する。

不動明王はいつもの如く火と情とのなかに安置せらる。

聖なる觀世音よ、冀くば嵐を静め給へ、

私をして星の如く黄金の言葉を得せしめよ。

尊い山門の佛なる仁王よ、あなたの失はれた殿堂は何處にありますか。

私もあなたと同運命のもので、私の心の都は長らく失はれて居ります。

私の想像の耳は兒童の叫び聲を聞きます、……

私の面前に幽界の兒童の保護者なる地藏菩薩は起つてゐる。

おお、美はしい蓮の花に坐つた小さい女佛よ、あなたの顔を擧げ給へ、

神祕の歌は今や破れる、

あなたの笑ひ顔、……

どうして私はあなたを忘れませうぞ、あなた、否なお前は私の死んだ妹だ。

無題

偶然が私をしてお前の存在に目覚めさせた。

私がお前と一緒に住居したに係らず、

お前を認めなかつたといふことは何たる愚鈍でしたせう。

お前は私に私の顔の類似がお前にあると考へさせる、……

お前は時日の長さを暗示する薔薇でないでせうか、

お前は夢と失望から生れた時の眞實な娘でないでせうか。

解剖と藝術でお前を批判するのは正當な方法であるまい。

ある人はお前には何等の魅力が無いといつて居る。

さういふものはさう云はせて置けば平和だと思ふ。
さうでは無いか。

海の騎手

自分は幻想の生餌、

霧のなかに浮動する追憶に魔はれる。

私は混亂の繼續を呼吸する所に生命があると思つた。

私は逃げだす門戸を要する一箇の犬、

平和と思想の搖籃のため自分自身を疲勞させた。

おお、大海に面して陸土を忘れ、

雷とどろく海波のなかに大きな歌を發見することよ！

私か風の間私に私の祈禱と夢を失つた時、

私は聲と喜びで作られた新しい生命を捕へ得た。

私の心は高く碎ける光と水と共に飛ぶ、……

おお、風と雲の私自身の靈！

今日私は恐しい大海の騎手だ。

私は以前地上で平和のなかに小さい歌を見出した、

併し今はあらゆる歌のなかに大きな沈黙を耳に聞く、

おお、海と歌と沈黙の私、

太陽と風が海を赤く暴らあらしくする時、私は風と海の騎手だ、狂人だ。

無題

月の忙しい足が

官能が目覚める影へと急ぐのを私は見る。

おお、私の心の静寂を完全ならしめ、

愛戀の幽霊をして歴史の創傷の上で舞踊せしめよ。

キーツ

忘れもしない紐育で 千九百十一年二月四日の夜。

この夜は清澄な香で濕つてゐました。

降りしきる雪は静な軍隊のやうに地上へ急ぎました。

私は燃える火の前に足を延べて、恰も祈禱でもするやうに

登る黄い焔の指を寂しく眺めてゐました。

私がキーツ詩集を側にふせてから數十分も立ちました。

私は美と悲みの月光でも飲みほしたかのやうに甘やかに感じました。

私の空想はなんだか知らないが不思議な形のない或ものの姿を捕へまし

た。

急にバイオリンの諧曲が私の隣家から聞えて来ました。

鳩のやうに天鵝絨の音調の羽矣よ！

どんなに優美にそれが降りて行つたでせう！

ふと私はこの諧曲の題は『平和』とでもいふのであらうと思ひました。

私は平和の夏の海へ沈んで行く事が如何に壯大であらうと考へました。

又その海から上つて來ることが更に壯大であらうといふことも。

諧曲は止みました。――

沈黙は白色だ、尊い祝福だ勝利だ。

俄に一箇の繪畫が空中に見えました。

年の若いキーツが死せんとする薔薇のすべての優美を以て横臥してゐました。

彼は死の花園から流れて來る香氣を嗅きました。

彼は頭の上に葦の薄黒い熱情を感じ乍ら、

目覺す心配なく、再び人間の歌で煩はされずに眠るといふことは如何に

甘やかだらうと云ひました。

晨と風のなかに消えゆく星の姿ほど美はしいものは無い。

黄金の夢のうちに死んでゆく詩人ほど美はしいものは無い。

『ああ、死よ死よ』と私は叫びました。

時計は十二時を打ちました。

私は隣家の音楽家も

同じ思想に動かされて居るのではあるまいかと思ひました。

何故なら、彼の諧曲は確に『平和』であつたから。

私は隣家へも聞えよがしに叫びました。

『御寝なさく……
左様なら……』

私の小さい鳥

私の小さい鳥、
私の母の涙から生れた私の鳥、
あんなに羽を延ばしつ、
飛び、
羽のなから私の母の消息を落す、
『家へ歸れ、懐しきものよー』

私の小さい河、

私の母の胸から流れ出づ、

急にその歌を止め、

太陽を見上げつつ、

小波のなかに私の母の消息を煌かす、

『懐しいものよ、家へ歸れ!』

私の薔薇、

私の小さい薔薇は私の母の呼吸で育つ、

今は悲しい、

その顔を下へと投げる、

私は私の母の消息を花瓣の上に讀む、

『家へ歸れ、懐しいものよ!』

堇

ある夜、

風や霧が一の悲しい追憶で灰色づけられ、

星が就くべき場所を失つた時、

私は街上に立つた。

私は星よりも年老いてゐると感じた。

私は通りすぎる人人を眺めた。

彼等は幻像とも思はれ、

灰の空気の一部に過ぎないとも受取られた、

私は彼等が存在するより寧ろ消えて仕舞ふのを喜ぶやうにも思はれた。

彼等は地上に於ける自分の影より更に朦朧と見えた。

幸福の谷から来る香氣に唆かされてか、

彼は體を前へのめらせて急ぎ足を進めた。

私はいく時間も彼等を眺めた。

俄に一少女の姿が私の眼に入った。

私は『お前は私が失つた愛人ぢやないか』と叫んだ。

神の祝福に狂喜せる花のやうに

彼女のちよつと上向ひた顔を私は良く記憶して居る！

自分の小さい足首を見せようとする有様も彼女の古い身振りだ。

彼女の着物は彼女の心のやうに軽く打つた、

彼女の毛の總くまも以前そのまま

空へ通ずる路に囁く草のやうに垂れて居つた。

私は彼女につき進んで、『私の愛いとしいもの』と叫んだ。

彼女は幾年前のことであつたかは知らないが、

私の失つた愛人であつた、——

恐らくそれは他のより幸福な世界のことであつたかも知れない。

南無三、彼女は消え失せた。

私は無益に彼女の後を走つた。

私はバイオレット堇の一把が地上に残されて居るのを發見した。

堇の心は彼女の心であつた。

おお、光と風の懷で

陽炎と驟雨に養はれた愛しいもの、お前堇よ、

私がお前に告別したのはもう幾年も以前のことだ。

私は美と愛の路を見捨てて、

都會と塵へとさまよつた。

おお、董よ、彼女は最早私を愛しないであらうか、語つてくれ。

おお、董よ、春と微笑のお前の心を打ち開いて呉れ、

私をして甘やかな過去を暫時の間夢見させて呉れ。

雑音と暴風雨にさいなまれた私の心は

不見界へ走る河に落ちる枯葉のやうだ。

平家を弾ずる人

舊日本の悲みと誇りで、

彼は天子様や勇者の憂を歌ひます、

宮中の美人の涙と愛戀を歌ひます、

彼の歌は悲しい薄暮の秋の歌、

彼の歌は半ば夢で半ばは苦痛、

歌ふ彼には、悲みを忘れんが爲めの祈禱であります。

古い世紀の影の下で、

如何に彼の歌が落ちる木の葉の幽霊のやうによろめくでせう。
記憶を投げだして放免されるのが彼の希望であります。

雨

雨は夢の如くに生れ、

そして藝術として死ぬ、

一瞬間に、

おお、僕の希望と死の幻！

僕の靈は

雨の銀線の上に踊る、

南無三、……僕は

自分自身の悲しい歌の上に踊つて居る。

花や木や山や世界は、
雨の涙で、
自分の生命や罪を洗ふ。
僕の靈は、
一層新しい生命に、
その深さに、
飛躍し得るだらうか？

無題

失はれた太陽を求める風の聲に、
追憶の眠した古い古い顔をしたふ
柳の歎息をお前は聞かないでせうか。
夜に迫る海の聲に、
暗明の物語の古い古い夢をしたふ
竹の歎息をお前は聞かないでせうか。
幽界を尋ねる河の聲に、
黄金の心の古い古い時代をしたふ

松の歎息をお前は聞かないでせうか。
むかし飛びさつた鳥の聲に、
足に天鵝絨の草履をはいた平和をしたふ
蘆の歎息をお前は聞かないでせうか。

蟲の歌

夜の呼吸のしたで、
黄金の月の杯がこぼした酒で燃やされ、
蟲が心の慄きに狂して居る。
喜悅と舞踊の聲は千種もあるが、
悲哀と幽霊の歌はたつた一つだ。
ああ、地中に歸つたものの熱情の歌、
今歌ひのこした悲しい歌に甦つた！
歌の心はそれが十分に歌はれるまでは決して満足しない、

おお、夜と傷つけられた心の熱情の歌、
蟲よお前の歌は、
熱病と夢で苦しむ私の心の叫びではないだらうか。

七月の日本

光る日没の幻想、
幽霊のやうに白く。

日は暗明に香ばしく、
餘り一杯で飛び得ない。

牛乳色の日本の七月、
なんたる語られざる夢の藝術！

お前は知つてゐよう、大海の縁と深さの上を、
(おお、太平洋の荒涼！)

愛の空氣に懸る提燈のやうに、日本は歌の苦痛に揺れて居る。

夕

私の追憶を甦らせる微風の夕、

夕は私の避難所、私の歎息する眼が星に遇ふべく急ぐ所！

あらゆる木の葉や花が疲れた顔を夕の紫色の呼吸に垂れる。

見よ、アダムやイブが歩みを家路へ向ける。

私は獨り月の上るを待つて、自分の影を見たいと思ふ。――

この世界中で私を戀ふたつた一つのもの。

春の提燈

おお、彼女の最も古くて最も若い愛、
おお、消えてなほも躊躇ふ彼女の心の香氣！
彼女の象牙の頬を接吻して、私は死にませう——
接吻に私は古い時から生れた最も若い靈を味ひ、
年取つた褐色の地から生れた薔薇を味ふ。
彼女の微笑は朝日に上る霧で、
彼女の叫びは暗明のなかに死ぬ夕方の鐘聲で、

彼女は悲哀と愛の創造——
歌に浮ぶ春の提燈である。

躑 躅

赤と白に躑躅の煌きが、

消え、燃え上り又消える、

空に太陽と雲が分れ合ひ又分れる。

白と赤の躑躅の雲のなかで

決して消えない一の煌きを見る、

おお、彼女の顔にある田園詩の美！

ああ、私の心の喜び！

赤と白の躑躅の雲のなかで

彼女は私の愛と歌とを待つて居るのではないか。

夢か？夢であらしめよ

(夢か？ 夢であらしめよ。)

花が

黄金色で深い

潮のやうに

高笑ひをする。

私の心は

花を迎へるため

飛びあがる。

(夢か？ 夢であらしめよ。)

かかる時、

あらあらしく叫び、

私に結びつくべくお前を呼ぶ、

麗はしい靈よ、

そして後私は星のやうに、

心が喜びに満ちて、

静まりかへる。

(夢か？ 夢であらしめよ。)

然し自由に軽い

雲のやうに、

空想に追はれ、

何處へとも知らずに、
それでも、
私はさまよふことを
喜ぶ。
(夢か？ 夢であらしめよ。)

私は足音を聞く

私は足音を聞く、
聲は灰色で柔かい。
それは忘れられた幽霊でせうか。
一滴、二滴、三滴、
雨はしたたれる。
空には一流れの雲、
色は大地のやうに古い。
それは過ぎゆく靈だとだれが云ふ？

私の足元に一片の木の葉が落ちた、
そして雲は消え失せた。

夜の風を追つて

私の心は休憩を求める。

暗さと愛の衣を着て

私の心は幸ひな祝福に動悸うつ。

聲

第一の靈

木の葉のなかへ微風の春がさまよふ、

私は鳴された鐘の聲と共に夕方の路を求める。

第二の靈

海の喜びは夏の霧の喜びだ、

潮の上り下りは歌の心へ捧げる私の祈禱だ。

第三の靈

旅の衣を紡ぐ私は秋の靈だ、
木の葉が空へ飛ぶ所に私の道は横たはる。

第四の靈

私は冬の雪に乗つて降り、
ただ日光の愛で救はれることを待つて居る。

琴の彈奏者

肉と愛の一塊、

彼女の存在が

夜の暗明を香氣の暗明とする。

接吻のやうにパット彼女の指輪が光る、

彼女の指が絲の暗明を波のやうに流れる。

彼女の心に諧音の微風、夜の心に音樂の幽靈、

それ等は夢の痛みのなかに消えてゆく。

小猫すずちやんに

静寂の夜の聲、

銀の星の慄き、

愛戀の深さの聲、

薔薇の花弁の落ちる音、

おすずちやん、お前の喉に音楽家が時代の埃のなかに

失つた樂器の絲があると、はれる、

おお、悲みの風を靡きながら

踊る仙女の聲、

おお、喜びが痛みに歸する聲。

空想の胡蝶

そして蒲公英と松の樹の間で

絲遊の着物きた天女が生命を歌つて居る、

私は空想の胡蝶一つを捕へようとする、

空想の胡蝶よ、お前は何故に私をかくも愚弄するか。

空想の胡蝶は今私の前、いな私の後、

その羽翼は銀 金に、

赤に白に、

金に銀に、

白に赤に焔く。

私から去つてくれ、空想の胡蝶、私を愚弄する悪魔、

私はお前に疲れて居る、獨りでありたい、

他日疲労の極、私はお前の足元で死んで仕舞ふであらう。

行つて仕舞へ、空想の胡蝶よ、私に休憩を與へてくれ！

おお、残忍な靈よ空想よ、かつてはお前は私の所有ではなかつたか。

私はお前を養ひ、お前は私の胸のなかで眠つた。

然るに今日お前は不思議にも私を愚弄し私を羽ばたく。

おお、空想の胡蝶よ、お前はかつては私に接近してゐたではなかつたか。

そして今日お前は遠くにある、お前は虚偽の靈だ！

空想の胡蝶は今私の前、いな私の後、

その羽翼は銀に金に、

赤に白に、
金に銀に、
白に赤に焔く。

夜

私は夜の女神を祝ふ、あなたの聖なる諧音は言葉なき花のやうな千年の物語を紡ぐ。

あなたの尊い仕事は満足の國から遠ざかつた心へ平和を持ちきたすことだ。

おお夜よ、人間に體一ばいの平靜を與へる温かさうな愛戀の外衣！

女王の月の光榮ある玉座を見給へ、そこから天國の消息が来る。

私は人間中の貧しいもの、天鵝絨色の夜の愛歌に答へたい。

おお、夜のものうい靈よ、天と地を結びつける星の神龜の戸を開け給へ。

春

私の心を眺める私の愛人の眼に、

愛の路、天國の路、私の胸への路を急ぐ彼女の歩みに、

無言から花咲く彼女の笑に、

私の眠りなき靈を甦らす彼女の手の觸れに、

雲雀の歌に、

私の詩に、

風の呼吸に、

水の泡に、

白百合に、

樹木に、

おお、春がある。

玩具

『私は太鼓の音を聞いて駈けだしました。』

私は悲しい不思議な物語をささやく森を通りました。

董や、それはそれは青い草を踏んで。

太陽は消えました(私は消えぬやうにと願つたのですけれども)

だが、俄に月は二つの大きな山の間に、よつと出ました。

それは何だかいつもの月とは異つた月でした。

私の心はその時なほも愉快な音を聞いて飛びあがりました、……………

賢い大きい旦那様、それはなんの音でしたでせう。」

私は小さい娘に云ひました……、

「実際に聞いたお前が知らないことを、どうして僕が知らう。

それはお前の心を踊らせる空の鳥ではなかつたか、

それは海の驚きを想像して飛上る魚ではなかつたか、

それはお前を家へ呼ぶ母親の聲ではなかつたか、

それはお前の後を追ふお前の妹の聲ではなかつたか。』

彼女は云ひました、

『大きい賢い旦那様、そんなものの聲ではありません。』

所で私は彼女に云ひました、『小さい娘よ、暫時眠つて御覽、

子供は夢のなかに失つたものを見出すと聞いて居る。』

彼女は小さい頭を私の膝の上に横たへ、

彼女の睫毛は、影を長く絹絲のやうにほつ、たに投げました。

彼女は急に眼を小さい太鼓のやうに開いて、叫びました。

『賢い大きい旦那様、とうとう私は思ひだしました。』

それは馬の首についてゐる鈴の響でありました。

その馬は私を大きなお城と澤山な玩具の町へつれて行くでせう。

私は破れては居るが澤山の玩具を持つて居ります。

ある玩具は山や海のむかうから来た見知らぬ人から貰ひました。

ある玩具はお母さん遠い國から買つて來ました。――

私はそれをお父さんが夕方のお經を始めると燈火のしたで遊びました。

おお、私はもつと結構な新しい玩具がほしくてなりません。』

私は古い詩集を側に置いて云ひました。

『懐しい娘よ、もつと新しい結構な玩具がほしいのはお前ばかりでない。

私とお前と共にお前が聞いたといふお馬に乗つて、

お城と玩具をめつけに遠方へ出掛ようかね？』

四月

木は天幕を疊む亞刺比亞人のやうに、
はつばを仕舞ひ込んで、
灰色の孤獨へ退いた。

僕は家を閉めて、

黄金の指先をさしのべる火鉢の火をいぢり
詩集一卷を膝にのせて、

坐りこむ。

そして薔薇色をした空想の上に

頭を垂れて

居睡し始める。

早や數箇月たつた、……

今日は四月だ。

春の目覺め祝ふ若い聲を僕は耳に聞く、

僕は家のすべての戸を打開いて、

櫻の木から立ちのぼる

白い香氣を嗅ぎ、

太陽を見るべく急ぐ。

僕は地上を眺め、

目覺めた愛戀を嗅いで見る、

僕は空へ向つて口笛吹く。
神は花の着物を着よと
あらゆる山に命令する。
僕は最早や動き初める陽炎を見る。
河に添つた啞の岩は
水の歌を學びたいと思ふであらう。
僕は河に僕の夢を送るであらう。
僕は木の下に坐るであらう。
僕は美人の來るのを待つであらう。
笑ひの冠つけて、
微風の草履はき、
青い生命の歌を口ずさんで。

月光の路を踏みながら。
ああ、今日は四月だ……
しよしよ春だ。

フミちゃん

仙女のフミちゃん、

彼女は真赤な手を擧げる、

これはをんもへ行けといふ印しるしです。

花は咲き、木は青い、

(世界はそんなに嬉しいと思つて居るの?)

小さいフミちゃん、

彼女はどんな聲にも耳をたて、

暫時はそれを考へて居る。

蟬は鳴き、風は吹く、

(世界はそんなに嬉しいと思つて居るの?)

生き生きしたフミちゃん、

歩き出してはパタンと倒れる、

彼女はまだ飛べない人間の蝶蝶です。

雲は舞ひ、鳥も舞ふ、

(世界はそんなに嬉しいと思つて居るの?)

甘やかなフミちゃん、

私は彼女をだつこする名譽を持ちます。

彼女はをんもへ行けと命じます。

空は灰色で、夏は過ぎて仕舞つた、

(世界はそんなに嬉しいと思つて居るの?)

夢

何うして又いつであつたか知らないが、

私は恰も懶い黄色な木の葉の一片のやうに、

ふいとこの世界を飛びだして、

驚異と組織のかすかすを盡して泳ぎ廻る地球を外から眺めた。

それは數千の他の惑星と遊んで居る小さい無邪氣な風船とも受取られた

私はちつとこの驚歎すべき光景を眺めて居ると、

いつの間にか不死の觀念が私のあらゆる骨や肉を慄かすやうに感じた。

ああ、なんたる大きな沈黙が私の體をしめつけたであらう、

恐しい沙漠と無限が私の體を取りまくであらう。

私は自然に自分が恰も眼前にある惑星の製造者であるやうに感じて来て

自分は神で、

世界の安價な接吻や思想は埃のやうに振ひ落され、

神祕と力と光明とが自分に流れて居ると思つた。

さうすると眼前の惑星は一度にぱつとその運動を中止した。

私は恰も眠る子供の顔をのぞく母親のやうに、

一一惑星のなかを靜かに覗いて歩いた。

私は其等の惑星からそれぞれ異つた音樂を聞いた、

併し人間の住む地球の諧調は最も甘やかで最も夢心地のものであつた。

そこには陸を慕ふ海の聲があつた。

そこには海に答へる陸の愛戀の聲があつた、
そこには星や薔薇の神祕を歎美する男や女の歌があつた、
そこには最も愉快に消えゆく風の聲があつた、
そこには日光を呼ぶ鳥の聲があつた。
それ等の聲が一つの大きな管絃樂となつた。
そしてその管絃樂がしづしづと消えて行つた時の快調は
どんな感動を私に與へたであらう。

陸に語る海の聲

陸に語る海の聲、

『愛と平和……愛と平和!』

陸に語る海の聲、

『汝に休憩あれ、温かく眠れ!』

ああ、なんたる尊い催眠歌よ、

輝く貴女よ、あなたが海ならば私は陸でありたい。

△宵海を見る私は苦い、

海は寒さに震へる、

陸の胸にかぎりついて。

月よ、上れ、夜的美をうたつて、

海をして微笑ましめよ。

さうすると陸の心はどんなに嬉しからう。

おお、輝く貴女よ、あなたが陸ならば私は海であります。

来れ鳩よ、空から落ちる雲のやうに、

来れ鳩よ、そして海に浴せよ、

おお、輝く貴女よ、あなたが鳩ならば私は海であります。

元 旦

一年の元旦は再びここに、母なる一地は再び喜ぶ、

大地は再び太陽と笑つて歩む。

見よ、太陽は楯を振りかざし、

寶劍の神祕をきらめかし、

沈黙と愛戀に満ちて動き動き、

大地を眺め眺め、大地を愛し愛し、勇敢に柔和に……、

祝へ祝へ、一年の白、元旦はここに。

太陽は熱情に熱して起ちあがり、

大地の腰を抱き、
男子の如く大地を捧げあげ、
大地を接吻し接吻し、抱合し抱合し、
愛撫し愛撫し、愛の血潮で大地を温め温め、
又接吻し接吻し、又抱合し抱合し、……母なる大地は再び喜ぶ。
ああ、一年の元旦は再びここに、
太陽は喜び、
大地は喜び、……
祝へ祝へ、一年の白い元旦は再びここに。

散
文

晨の空想

私の晨の空想は障子を左右に開いて始ります、外國人が書く日本小説だと差詰め私の園庭から『消え行く夜のラプソデーを歌ふ』富士の尖峰を見るといふ所なのですが、私の園庭から富士は見えません。又見たくも無いのです。私は快適な平靜を支配し得たのを感謝し乍ら、私は左右に障子を開いたのであります。私は昨夜讀んだ某婦人の詩集を忘れることが出来ません。昨夜は夜中集中の詩から出て来た香氣が、忘れられた木の蔭から浮き出る幽靈でもあるかの如く、私の心を影の様な手で撫でるのを覚えました。而して私は今朝また昨夜の香氣を夢見てゐたのです。誰かがくれた下らない仙女香とか何んとかいふ安價な香を燃すと、花に

戯むる眞珠の羽翼をして居る胡蝶の様に登つて行く、登つて行く香の煙が私の空想を誘ふのでありました。私の空想はいらいらして狂亂の状態である。私は之を追ひ拂はんとしても不可能であつたのです。私の空想其自身は私の記憶を追ふ何かの灰色の着物をつけた幽霊ではあるまいかと思はれたのです。

"I know you ghost of some, lone, delicate hour,

Long-gone but unforget,

Wherein I had for guerdon and dower,

That one thing I have not."

184

昨夜の女詩人をインスパイアしたのは白色の花の木犀なのです。私は木犀を愛するので私の園庭で左の方の戸袋の側に一本かなの大きいのが直立してゐます。私は常に『我我近代人は唯花や木だけを有してゐて園庭を所有せぬ』と云つて居るのです。私は斯る状態は悲む可きものだと思ひます。兎に角私の園庭に大きな木

犀が一本あるのを誇りとしてゐます。

私は障子を左右に押し開いて椽側へ出て太陽の照らす所で茶を一杯飲みます。園庭を眺めると紅色の袖口をつけた花は最早青色の外衣（青色の衣といへば詩人ゴールドスマスは青のチョッキが大の自慢で、着物の借金をうんと残して死んださうだ）に變へて居る。青色は青年の表象とも云へるし又熟して來た愛の實現とも云へます。私も段段春よりは初夏を愛するやうになりましたが、もうさうある可きであらうと思ひます。此の初夏の微風は音樂的の羽翼を自由に輕るさうに空中を羽ばたきして廻つて居るです。此の空中の音樂家も春陽三四月の頃には随分人に難癖つけられたものだが、今では彼等の天下で誰一人彼等を非難攻撃するものは無いのです。私の空想はそれからそれと轉轉して來まして、書籍問題から憐れな文學者の身の上へと飛びました。私は呼びました『本を書くのは眞平御免だ、これから讀書家の方へ廻らう。』それも宜しからうと自ら答へるといふ天下

185

泰平の状態を私は十分今朝味ひ得た次第でした。私は空を見上げて鳥三つ四つ飛ぶのを見ますと、私の心は直ぐ其後を追ひ掛けました。全く私は左の二句を高誦せざるを得なかつたのです。

“Today my soul's a dragon-fly,

The world a swaying reed.”

園庭を眺め乍ら私は云ひました、『園庭は自然に何等の關係が無い、假令あるとしても其關係は餘り大では無い。』私は壁や垣根で取り圍まれて漠然自然ネイチュアと稱せられる數百坪、或は數十坪、の地面で、園庭が出来ると考へて居る人の愚を哄笑せざるを得なかつたのです。其處には人間の藝術が入らねば駄目だ、其藝術を自然の呼吸で着物附けるのだ、園庭で人間の藝術を自然と共に讀むことが出来ぬ様ではろくな園庭で無いのです。自然の寂しい呼吸の下で、人情の暗示を得て始めて園庭の妙を感じるのです。私の理想の園庭は沈靜であつてほしい。沈靜の美を了解した時

は、聲其物を野卑の斷片と思はざるを得ません。園庭には勿論木も必要だし、出来るなら石の燈籠もほしい。園庭は詩であつて其處で私自身の空想に適當な意味を隨所に發見したいと思ひます。私の家の園庭を一つ作り替へる時期が到來して居るのです。

花に對する態度

花に對する態度としては私は所謂花の先生よりはお茶の宗匠に組するものである。元來は景慕の證據として存在するに至つたに相違がない理論も、今日では花の先生を惱すに立ち至つて居る。而してお茶の宗匠が花に對しては、所謂偶然の藝術を尊重する態度に出でて居ると云ふことが出来る。其態度は自然であるに反して、花の先生は形式の特長を力説して、裝飾的といふ言葉はただ一の辯解に止つて居るとより思へない。諸君も御存じのやうに、花は如何なる花でも其自身已に何等の力説を加へずに裝飾的であります。西洋が日本の藝術を解釋するに當つて用ひる言葉の中でも、この裝飾的なる一語は有力なものであります。けれども

私の意見では古今東西を問はず、力説の道具を使用しては眞實に裝飾的たらしめることが出来ぬ。例へば光琳にせよ又抱一にせよ、眞實の裝飾的といふ要所は一番少く裝飾的なる所で初めて表現したもので、言ひかへると最も自然にして初めて裝飾的たることが出来るのである。日本の藝術に對して自然なる言葉は實に古く、而も新しいのである。私が花を觀賞する態度は、私の心が花の美を制限するのを欲しませんから、何處までも自然でなければならぬ。私は私を説明する適當な言葉を知らぬから、假りに『私は花に於ける眞實の自然を見たいと思ふ』と云ひませう。若しも君が、私が花の選擇を喜ぶと思ふならば、それは誤解である。何故ならば私は君にさう見せる場合があつても私自身つひに花の選擇を弄したことがないので。花の崇拜者として私の價值は(さういふ價值があるとしたならば)床の間の上で竹の筒なり、又青銅の薄鉢の中でも花をして何處まで歌をうたはしめるかにある。

十六世紀の茶の宗匠利休が嘗て太閤に朝顔を見るべく招いた一小話を記憶して居る。其當時では朝顔も至つて珍しかつたのであるのは云ふまでもない。殿下が來ると定められた當日になると、利休はあらゆる朝顔の花を切捨てさせて仕舞つた。今や茶席の方へ歩いて居る殿下の顔色は不興の體であつたのは、朝顔の花一つも眼に觸れなかつたからである。殿下は利休へ汝の朝顔の所在地は何處だといふ詰問を掛けられた。利休は無言であつた。併し乍ら殿下が足を茶席に踏みいれると、見よ、朝顔の花一つ如何にも忘れられた日光一片の如く妖嬌とした姿を床の間から顯はしてゐたのである。實に大利休は其他幾多の朝顔を犠牲にして、ただ一つの朝顔に十分な特種の取扱ひを與へたのである。さうすると生きて居る一箇の朝顔も生き甲斐があるし、又死んだ方の朝顔も死に甲斐があつたといふことが出来る。私の花に對する態度も利休と同様で、花の全體を觀賞するのではない。柳の小枝一本にせよ或は梅一輪にせよ或は蓮花一つにせよ或は又朝顔の匍匐にせよ、私の要

求する所はただその暗示の一點にあつて、他の部分を全然犠牲にするに躊躇しません。斯かる態度を單に暗示的であるといふと人を誤解せしめる。私の花に對する態度に何等か藝術的價值があるとすれば、床の間全體を廣いキャンバスと見て如何に空間を残すか、言ひかへると、床の間の空間を何う優美な空無で蔽はんとするかを教へる點にある。諸君はそれを日本の藝術と云ひたくばさう云へ、私の信ずる眞實の藝術には東西の區別が無く眞實の藝術は何處でも無い所から産れるのであります。

春の思ひ出

十二月の冷い白雪を笑ふ花と見立てるのが日本人の想像で、その想像の燃える火の力で、地上に敷く霜或は餘り嚴肅で言葉さへ出し得ない北風のなかから春の王國を築くのである。我我は冬の存在を絶對的に認めまいと希望する。我我は一年が三時期で出来て居るとさへ考へたいのである。日本人の心は、希臘思想ギリキョソットのやうな堅くて有限的な支那思想を見捨てることが出来た時に、初めて驚くべきものであると常に思つて居る。支那思想の倫理觀は幻想の美さへ輕浮として取扱つてゐる。我我が佛敎に感謝する所があるとすれば、それは自然の價を認識するといふところが人間の精神生活の大部分であると獎勵した點にある。我我は日本文學史の上に日本

と支那の二箇の思想が絶えず鏑を削つてゐた奮闘談を讀むのである。もともと梅花を賞し或は梅花を倫理化して見るのを教へたのは支那思想である。又大體からいふと鶯も支那の鳥であり、又詩人キーツの歌つた鶯の様に、日本の鳥といふよりは寧ろ希臘の鳥であつた。併しこの梅花や鶯をして春に憧れる情熱の暴發を表現せしめるに至つて、初めて彼等は日本の産物となつたのである。キーツは鶯を歌つて眞理と美の二字を最後の言葉として居るが、私は鶯と眞理や美とを一緒に同體に考へることが出来ぬ。我我の興味はこの鳥が春と日光とを追つて、深い山を見捨てたその抵抗することの出来ぬ衝動の上に置かれて居る。我我日本人が多くの點でセルチック民族の個性的快調を表示するに對して特種の注意を拂はねばならぬ。又春に對する我我日本人の思想——寧ろ躁暴であり又常に烈情を泄へて居るその思想位、明白に力強く國民性の一を説明するものは無い。

十二月の終とあると天空は灰色で曇である。紅葉は已に血で自分の歴史を書い

て去つて仕舞つた。この紅葉が斯る悲劇的最後に演ずるまでの忍耐強くゆるやかな自然の歩みを思つて見給へ。自然は少しもあはてない。輕卒でない。冬ではあるが誰の家でも部屋の内には春がもう来て居る。福壽草の一鉢位は床の間に据えてあらう。又この床の間から天下の春は笑ひ初めるのである。舊式な服装でやつて来る新春を迎へる爲めに何か相應しい掛物も床の間に懸られてゐよう。火鉢にはばちばち炭が燃えて遙かな森林の粗野な人情を談ずる音がする。下女や下男は街から新年の飾を買つて歸へる。門松はなるたけ大きいのがよからうと助言する。外では愉快な顔をして子供が遊んで居る。さうすると寂寞と詩とで満ちた我我が家にも春がやつて来るのである。私は室内に籠つて一步も踏みださぬのは、折角骨を折つて創造した春の氣分を失うまいと思ふからで、一日一日と經つと外部の自然は破顔一笑の體を供へて来るのである。さうなると私が部屋の内を打開けて、室内室外の空氣を相まじへても自分の感興は破られ傷つけられる心配はあるまい

と思ふ。私は流れに添つて梅花の雪を見るのを喜ぶ。その有様はまるで土佐繪其儘である。又北齋や廣重の繪にあるやうに櫻樹のもとで遊び舞ふ民衆を見るのを喜ぶ。詩人が春を歌ふのは、春を不思議な突飛な事件と取扱つて、この神祕的な世界をして笑ひと涙と一緒に腕を組ませて歩かせたいとの希望からである。

客觀的に出立した私の春に對する思想も、段段徐ろに主觀的觀賞に入込んで、私の精神的素質が四月には不思議に開發して、私は最早や春の箇箇別別の姿を見無いので、有らゆる春を打つて一丸とした大きな幻想を眼前に見るのである。その幻想が霧のやうに見えたり見えなかつたりして私の存在はその呼吸の中で失はれるのである。自分の存在を無にして私は初めて生の最も大なる喜悅に接し得るのである。そして私は漠然として夢を接吻するのである。

季節は降雨期に入つて、初夏になると勢力を消散せねばならぬからその準備を急ぐのである。支那畫のやうに客觀的に壯健に出立した自然は、今や逸樂的とな

り又現實味を加へて來て、繪に譬へると四條派と變じ浮世繪ともなつて來る。そして藤の花や菖蒲の季節となると、それは光線の模様藝術と展開するのである。五月に於ける日本の自然は一番模様式色彩に豊かである。

お菊夫人

薄暗い悲しげな雲はたうとう破れまして、梅雨期は此處に終りました。古い名香の疲れた呼吸のやうに、灰色で柔かな眞實なる日本人の空氣は梅雨期に發見せられると主張する人に私は賛成するが、私は其美を見たく希望しません。私の叛逆的意志が動いて反對な態度を取らしめるのである。今朝は太陽の光線がまるで黄金色で、さりとしてさう粗暴でも無く、自分は布哇かフィリッピンにでも居るのかと疑はれました。實際は私は東京に居るので、今電車に乗つて三田の學校へ急いで居るのである。もうそろそろ暑いのであるから皆が申あはせたやうに、申譯に薄い單衣を身に纏つて野蠻な行爲をしようと思つた連中で電車の中は満ちてゐた。彼

等の多くのものは脛を丸裸に出してゐた。併し西洋生活に慣れた私の心は彼等の野蠻主義の爲め少しも負傷はしなかつた。して其光景が北齋畫中の人物のやうに如何にも小説的に見えたことは、元來私の心の中には野蠻の一片が存在してゐて私自身は熱帯地方の不倫理な情緒を愛するものであるからでせう。日本で不倫理であるのは少くも心地の好いことである。私は電車の中に多くの女を見ましたがそれが不思議にも打揃つて若か若かしく見え、野良猫のやうに野性で珍奇に受取られました。すると私は自分が急に外國人であるやうに感じられました。日本の女は皆な萬年新造で年も取らなければ見悪くもならぬと思ひました。電車の中で私のすぐ前に一人の麗はしい小娘が坐つて、十七にはなつてゐますまい。温かい日光に照らされてその女の象牙色した顔の皮膚は丁度眞珠のやうに内部の光で輝いてゐました。單衣の綿服を着て、日本の意匠である自由な派手な模様がその女の如何にも屈託のない生の喜びであると感ぜしめました。私はその女の色彩がこ

つてりと盛りあがつて全體の調子が頹廢的な六七十年以前の錦繪から抜け出したのではあるまいかとさへ想像しました。其服の綺麗で鮮かなことは海の水のやうで、決定的で何等恐れる所があると思はれ無い。實際西洋人にさへ色眼を使つて愛されるのを希望さへする大膽を示してゐたのです。この女はロチの小説にある『お菊夫人』であるまいかと思ひました。お菊夫人の如く如何にも野蠻的に心を奪ふ所があると思つたのです。このお菊夫人は懷に小さいハンケチを入れてゐてそのハンケチを出したり匿したりしてゐました。それは外國人が鼻をかむ普通のものであつた。私は何故この女はそれを大事さうにして居るかを疑つた。この女ばかりで無く日本の女は一般にハンケチでは鼻をかまずに其他様様の用をさせる。私はハンケチは鼻をかむ丈けの物と西洋で教へてくれたのですから、日本の女のハンケチの使用を如何にも尾籠の行爲と感じました。併し此電車内のお菊夫人がハンケチを出したり入れたりするのを見ましても、私は必ずしも笑ふ可き行爲と

感じなかつたのです。私は彼女が何故にそれを重大視して居るかの理由を解決せねばならぬとさへ感じました。

私はそれは織つたものに對する遺傳的の尊敬からであるかも知れぬと想像しました。或はさうで無いかも知れぬ。すると其の理由はなんであらう。私は動く電車の中で私の空想を續けました。私は急にそれは或る西洋人がこの無經驗のお菊夫人に與へたハンケチであるかも知れぬと思ひました。彼女の西洋人の愛人はこんな詰らぬハンケチ一片で彼女を買収し終つたのである。『さうに違ひない、憐れなお菊夫人だ』と私は空想の中で叫びました。

私は義塾へ急ぐべく適當の場所で電車を降りました。併し私の心は電車で見たお菊夫人のハンケチ問題で占領されてゐたのです。彼女は正直で眞實であらうと私は思つて同情の感じが満ちました。學校へ着くと時間にはまだ間があるので教員室で坐つて居ると、私は自分がハンケチではないか、貧弱な英語の知識を懷

の中から出したり入れたりするお菊夫人の一種であると急に思ひました。外國人がただ鼻をかむに止るハンケチのやうに、私の英語の知識は取立てて論ずる價の無い詰らぬものだが、私はお菊夫人のハンケチの如く私の全體を賣つて初めて勝ち得たものであります。私は私の夢のなかのお菊夫人のやうな正直であり、眞實であります。誰か私を嘲り笑ふであらうか。

東洋と西洋

私は窓から街上を眺めました。その窓の前には宛も愛戀に觸れた處女の心のやうに不安に爛る若い柳の枝が揺れてゐた。私共は談話（ゆつたりと金色に照る四月の午後の二時間を費すには格に嵌らぬ不即不離な藝術論にこしたものはあるまい）が急にだれたので私は何んの氣なしに窓から街上を眺めました。私共は今銀座を横町に這入つた西洋料理屋の小さい食卓の周圍で、都會の噪音から遠ざかる避難所を發見したのである。私の友人の作曲家は茶を飲み終つて、談話を續けました。

『随分以前のことだが、僕が歌舞伎座に關係があつて今ぢや古人に成つて居る三

味線弾きに、ソラ米國のペーンの『故郷ナット・キートン甘やかな故郷』の一曲を聞かしたことがあつた。聞き終つてその奴さん何んと云つたと思ひ給ふ。奴さんの云つた言葉に全く驚いたのだ。「豪氣なものだ如何にも堂堂たる曲ですね」と奴さんペーンにひどく感心したのだよ。かう的外れに感心されてはペーン先生も心苦しからう。それから歌舞伎座の奴さん曰く、「芝居で最初か最後の幕——最初の幕なら多くの侍が居並んで新年の御慶を申上げる所か何かで、その曲を奏したら至極結構でせうね。」かういふ批評は僕の夢想だもしなかつた所であるから驚かざるを得なかつた。然し考へて見ると、これも東西兩洋、少くも音樂の上では異つた出立點を持つてゐる適例の一になると思ふ。僕が奴さんにペーンの曲の性質は斯く斯くであると語つて聞かした所が、奴さん變な顔色をしてか自分ながら驚いてゐたやうに見えたよ。』

此の喜ばしき談話家は私から裏書エンドースメントの言葉を得たいかのやうに私を見上げま

した。この興味ある問題は更に一考を煩はさねばならぬと思ふと、私は急に熱心になりまして、さて云ひ出しました。

『歌舞伎座の三味線弾きと同じ境遇に置かれた経験を、僕は一度ならず二度も三度も持つて居るよ。それは僕が米國へ渡つた當時のことで、まだまだ米國に氣化するにはまだ間が有つた時のことだ。僕の友人が僕を紐育で、一々其節大流行を極めたケーキ・ウォークを見に ウェバー・アンド・フキールドといふ日本で云はば定席の大きい様な場所へ案内してくれた。ケーキは菓子でウォークは歩みだ。何ういふ譯でそんな名稱を與へたのかは知らぬが、黒奴がびつくりするやうな大きい向日葵サンフラワーが何かの花を胸の鈕釦の穴へさして、手に大きなステッキを持つて、美人と腕を組み乍ら妙な腰付きをして音楽の調子に連れて歩むのだ。手に持つたステッキの先には赤か緑のリボンが着いて居る。頭に冠つた禮帽シルクハットも赤か緑の色で染めてある。舞臺を歩く様子は、まるで自由意志から墮落した變痴氣林な惡魔とも云へる。

眼を開いて舞臺を見て居るとそれが滑稽であるのは承知されるが、一度眼を塞いで音楽文けに耳を晒すと、今でも僕は考へると其理由は分らぬが涙が自然に流れ出た。僕の友人は僕の泣いて居るのを見て皮肉に云つた、「面白い場合に泣くのが日本流かね。」日本人は常に西洋人とは反對に動いて居る。一般に日本人は性質上パレードキンカルであるといふのを僕の友人が意味したならば、彼は兎に角正しい的を射つたと云へる。併し僕は其時彼に返答せず此の問題を閉ぢて仕舞つたのは問題として餘りに大きいので即座に返答が出来なかつたからだ。若し僕が彼に君等に愉快な音楽が僕等日本人に悲しく響くと單に語つたならば、彼は必ず其理由を迫つたに相違ないのだ』

僕の友人なる作曲家は未だ云ひ終らぬ僕の言葉を遮つて云ひました、『今は故郷へ歸つた筈の例のケーベル先生だ、先生は二十幾年間の長月日をを日本で費したのにも係らず、日本の音楽にはハーモニーが無いと野蠻にも結論を與へてゐた。

そして自説を一寸も曲げずに日本を去つたのだ。斯くもケーベル先生には侮辱された日本の音楽も我我日本人にはふつくと柔かに、甘く又悲しく響いて西洋人の日本の音楽に對する不平の理由を知ることが出来ぬのだ。西洋では日本の三味線などは唯もう騒騒しいばかりで、良く云へば原始的で無修養で粗雑な音が無暗に一所に集つたとしての外受取りやうがないと酷評されて居るが、日本人の耳で、二上りでも三下りでも聞いて見給へ、たまらない位愉快なものだ。我我が三味線を聞くと、その音に連れて目覺めた過去の幽霊——その幽霊は勿論愛戀の幽霊だ。浮んで顯はれて來るやうに思はれるのは遺傳的聽官の然らしむる所であらう。我我には三味線は野蠻的には響かずに暗示的に響く。原始的であるよりはかなり複雑で、聞いて居ると自然に興奮して來て想像力が急に生きて動いて來るのを覺える。三味線のインスパイアする愛戀に撃たれて、一種肉體上の苦痛さへ感ずる。その愛戀が仕舞にはセンチユアリチーの悲哀と化するやうになると云ふことも出

來る。さういふ場合には我我は世界や人生を忘れて、愛戀と合一になつてその面前に跪くのである。西洋人に對してはまるで無勢力な三味線が、何うして我我日本人の心を斯く左右することが出来るのであるか。』

私は此處で語る機會を捕へて云ひました、『我我の聽官ばかりで無い、その他の官能——五官あらうが十官あらうが、西洋人の官能とは別途に動いて居る。今其一例を擧げて見るならば、随分以前に貞奴の一座が桑港で興行（如何にも不成功な興行であつた）して楠公の子わかれの一幕を米國人に見せたことがあつた。僕等の眼には楠公劇もその權威を失つて仕舞つては居るが、一般の日本人には悲しく涙を催させる楠公劇のクライマックスも米國人に何等の印象を與へなかつた。そりや勿論言葉が了解されなかつたのが大きな理由ではあつたには相違ないが、日本の俳優の顔の表情が、泣いて居る場合を怒つて居ると受取られ、楠公の扮した川上（如何にもまづい役者であつた）が涙にむせんで口をもがもがして居るのを、

ありやチューイング・カムでも食つて居るのかと米國人は疑つた。かうなつて來ると、川上一座は愚劣極まる役者であつたけれども、唯もう言語道斷であると引きさがる外は無いのであつた。』

これまで無言で謹聴してゐた他の一人の友人が云ひました、『文學の上でも斯かる相違が東西兩洋に存在して居るのぢやあるまいか』と。

私は答へました。英語を使用する作家の一人として、私は屢々私の意味や想像が誤解されたり又重視して貰りたい場合に何等の印象を與へなかつた實驗を持つて居る。アゼニウム紙上で批評の大家が私を批評して、野口は言葉に餘りに多くの依頼を持つて居る。言ひかへると野口は餘りに多くの色彩や意味を語らしめやうとする。時には出て來ない意味や色彩を無理にその言葉から驅りださうとする點は議論の餘地があると云つた。そりや實際には相違はないが、私の努力が屢正當に了解されぬといふ點は私は斷言して憚らぬのである。かう云つても其

れは私の東洋的自負心ぢや無い。西洋人はまだまだ日本人の想像や思想を受け入れ無い。大手を擧げて賛成の意を表さないのは事實である。西洋人と云つても私は此處では英國人を意味するが、英國人の文學上の心とその國語の缺點を知るのは、日本の書物からの英譯を見ると一番の近道であると私は思ふことがある。英國の批評家が發句詩を評論する場合に、いつも「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」の句を引用して居るのを發見する。成程英譯を見ると原形の十七文字よりは遙かに文學的に勝つて居るやうに見える

“Thought I, the fallen flowers

Are returning to their branches;

But lo! they are butterflies.”

併しどう考へても西洋人が賞讃する程名吟でない。外形上で作家が巧な比喻をしたるを否定するのではないが、私は斯く判然と定着的に説明せられたので詩と

しての呪符を全然失つたものだと言ひたいのです。この明確といふが所謂英語の本質の一であつて、英語英文學の力には相違ないけれども、明確の二字が不明確な日本人の思想と想像へ適用されると直に弱點と變化するから不思議です。日本人の國語を不文典式であり又日本人の心を曖昧であると評するのは正當では無い何故なら彼等の美なる點は明確の状態から翱翔して居る點であるからである。英語では悲哀の語は喜祝ジョイ或は美の語とは全く異つて居る。併し日本の詩の上では彼等は同じ者だと云へる場合が少く無い。唯表面上色合が違つて居るのみであると云へる。「悲哀は美なり」といふ句は西洋では比較的近世の創造に掛つて居る、又悲哀が他の言葉と同一に使用されて居る場合でも、日本でも日本人の了解と等しい了解を以て使用はして居らぬ。言語の上ばかりで無く、日本人は人生の上でも悲哀と美を同一視、或は同一視するのを以て時には尊しとさへ思つて居る。近松などの心中の悲哀を美化して、死するのを以て喜びとなし、或は美であると無理にも解釋

しようとするのは、日本人が先天的に悲哀の美を認めて居るといふよりは悲哀と美を同一視する素質を供へて居るからである。我我一の句がある、「眼で泣いて心で笑ふ」別に正當な表現の言葉が無いから、只「パラドキシカルな日本人」と云ふより仕方があるまい。斯かる日本人の本質上の特長が西洋人をして我我を了解せしめるに非常に苦しませしめる。我我日本在來の文學が未だ西洋人に對して一箇の封印されたる書物たるに止つて居る理由も其處にあるのである。再び私は云ふ「我我はパラドキシカルである、又その逆説的であるのを誇るのである。其處が我我の價であり力である熱情である。」

口嗜の凋落

冬季の寒冷に畏縮する私も時には他の季節に發見せぬ蕭然とした受動的な灰色の氣分に觸れることがあつて、自分を更に自然に思ひ高壯(sublime)にさへ感ずる場合があります。春も段段進んで來て四月の末になると、落花狼藉の光景を見て、私の心は急激に紛擾し惱亂するやうにも思はれて、百人一首の某歌人と共に『しづ心無く花は散るらん』と感じ、只管自分の古い日本人であるのを誇ることもありません。五月になるともう初夏で、心の平靜を全く取戻して、二月の末に半分丈け見て其儘のこして置いた夢をまたぞろ見初め乍ら、『眼に青葉山杜鵑はつ鱈』の氣分で五尺幾寸の小軀をのびのびさせ、ブラウニングで無いが『神は天にあり世界

は萬づ正し』で、春の紅い着物を捨てて初夏の青色に衣替へする自然に心一杯の感謝を呈するのであります。私の心に先づ第一に浮ぶのはフヒオナ・マツクレヨッド(シヤープ)は一生をフヒオナなどと文壇の女形(おやま)を極めこんでゐたとは甚だ以て怪しからぬ物騒千萬な文學者であつた)の句、『嗚呼、青い色の、人生なる、かな』であります。私が此句に興味を有つてゐます理由は、或は此句を吐いたフヒオナの理由とは相違してゐるかも知れません。併しそんなことは何うでも良いのであります。唯私があるゆる樹木に敬意を湛へて居りますのは、その樹木が特種の季節に持つ花や果實の爲めでは無く、實に初夏の候にどつと潮のやうに満たします彼等の青い木の葉に對してであります。私は青い木の葉の魔法に觸れると、私の青春の紅い血は再び歸つて來て人生を新たに立出する愉快を感ずるのであります。私は未だ嘗て山杜鵑の聲が如何なるものかは聞いたことが無い。併し私の想像力はウオズウオスの杜鵑(ツグ)のやうに、『眼に見えず、一の聲又一の神祕で、永久に慕はれべきもの』

と思つて居ります。私の想像力は日本の山杜鵑は英國の杜鵑の如く羽翼を供へた希望の幽靈か、或は我が握りたく思ふ黄金時代の表現であるとかへ思つて居ります。近代に至つて初鯉の權威は一方ならず毀損されたのであるが、前記「はつ鯉」の十七字が詩人ばかりで無く一般市民の聲であると受取られた舊文明の徳川時代に生きてゐた人の食物に對する舌は極めて微妙に又區別的に發達してゐたものと見えて、『鎌倉を生きていでけん』初鯉を賣つて歩く聲を耳にしては、着物を質に入れても只その聲を聞捨てにすることが出来なかつたのである。如何にも懐しく腐つて、愚かで、小説的な舊徳川文明よ。一般の市民が初鯉に憧れたのはその魚の味の上にもあつたでせうが、季節の所謂走りを入るといふ刹那の興味を見逃すことが出来無かつた。唯食物の點ばかりで無く、其他如何なるものの上でも走りに接するといふ特殊な氣分で彼等は生きて居り又死んで行つたのであります。彼等官能の奴隷、最も痛切に常識を否定した不實地的な江戸ツ子！

私は嘗て三馬作『料理を食自慢するの人の表裏』を讀んだことがあつた。其中にかういふ場所があります、『けふは料理番が代つたナ、ナニかはりはしねエ、代らねえことがあるもんか、御口中が曇らぬ鏡だワ』

これは所謂半可通(a fellow half-learned)の態度を嘲つた三馬の皮肉であります。其時代のもものは一般に、生花又は茶の湯同様料理をも習つて口嗜の鑑定を紳士の資格としてゐた世相の半面とも見ることが出来るのであります。無教育な江戸の立役者なる武士が差詰自分の荒つばい虚榮心を満たす爲めに、その初期時代では皆な建築に走つたのであるのは如何にも自然であります。而して時代が段段圓熟するに従つて着物の模様或は色合に對する趣向を吟味するやうになつて徳川時代も一廉の文明に達したのであります。千八百四年から千八百三十年に渡る文化文政時代には料理も追ひ追ひ一種の新しいカルトとなつて來て、自然の順序として平清、葛西太郎、百川或はその時代の大デカタンを以て自任して居た抱一(雨華

庵主) 其他の愛顧を保つて山谷の八百善なんといふ料理屋が開かれるに至つたのである。この封建文明の絶頂時期なる文化文政の心の中には已に迫つて来る凋落の潮の聲を聞くのであります。

私は世界を通じて十九世紀の初葉に現はれた才子の一人なる酒井抱一上人に大な興味を感じて來ました。酒井家十五代備前守忠卿の二子として生れた其地位に附着して居る形式張つた虚偽の空氣を打拂つて、詩と藝術に逃れて、詩と藝術が主張する程良い抑制を受けて抱一の放蕩心(放蕩するのが自然に見える位な愉快な舊時代であるのである)は漸次に蒸溜され又洒脱するに至つた。前時代に於ける光琳の豁達で自由な藝術上の模様美も、抱一の手で取扱はれると纖巧輕快の繪畫となり、晋其角の文學の上の遣放しな男性美も彼はそれを即興的洒落と化せしめるに至つたが、一般の論者は時代の影響からそれを解釋しようとはしますが、抱一の官能(詩的であらうとも亦詩的で無いとしても)は特別に感じ易い鋭敏な素

質を供へてゐたのであります。抱一ばかりで無い、其時代の他の藝術家或は詩人が衣服から食物に及ぶ人生の問題で、如何なる嬌嫩な敏感を有してゐたかは實に驚くばかりであつた。その藝術的な纖巧の態度は、一寸指の先で觸つても心の中心點を亂すと思はれる歌麿の美人にも比較することが出来ませう。其時代のデカタンの舌は一杯の冷水を飲んでも、その味から水の産地を識別し、又一味の茶が如何なる太陽の光線で養はれたかを語ることが出来たと云はれて居ります。これは私の讀んだ小話だが、何日八百善で初鰹のさしみを食つた抱一は料理番を呼出して、とぎたての庖刀を用ゐたのでないかと責めました。驚いた料理番の質問に應じて、抱一上人はさしみに砥の氣が移つてゐた、さしみの庖刀は研いたならば數時間は井戸の水につるして置いて用ひべきものだと言明したさうである。

三百年の長日月續いた舊文明は半世紀前に滅亡して、我我は急激に混亂の中に投ぜられて、混亂の状態が續く猜疑の爲めに我我は常に不安であります。已に心

の平靜を缺いてゐるのですから初夏が來ても心の満足を持つて樹木の青色を觀賞し或は山杜鵑を耳にしたり或は初鯉の味を得ようとして着物を質入する心意氣を示すことが出來ぬのであります。嗜の鑑定乃至趣向は文明最後の發達であるが、徳川文明が贏ち得た舌の敏感もその文明の凋落と共に亡びて仕舞つた。十年の西郷戦争を一期として新時代も漸次其緒に就いて、異つた繁榮を招く工合になつたが日本固有の料理上の藝術は、千八百八十年頃から東京市中に此處にも其處にもと顯はれて來た。或は西洋軒とか或は東洋軒とか或は何或は何とかいふ西洋料理の爲めに非常な阻害を蒙つたと云はねばならぬ。西洋料理屋では在來の料理屋とは異つて手取り早く食事することが出來、又安價といふ後援が控えてゐる。近代の日本文明は經濟の二字で解決されてゐる。西洋料理屋の成功はその二字を守本尊にして居るからである。私なども中食には何々軒とペンキ塗りの看板を出して東洋の美術園といふ責任を忘却し終つて、上海の片田舎か市俄古の郊外宜しくとい

つたやうな建物の二階へ押しあがるのである。西洋料理屋が安價だと云つても食はせるものの相場からいふと、これはまた滅法界高價なものであります。僕のテーブルの側に坐つて居る紳士諸君、スープを飲む時そんなチュウチュウ聲をさせるものぢやありません。又そんなにナイフやホークをがちやさせたいけません。食事し乍ら揚枝を使ふなどは無作法です。どうかそんなに大口開いたり、欠伸をしてくださるな。ナイフを落した人は誰ですか。このナフキンは誰のですか。ああ、なんたる無作法よ。これが昔の時代には行儀作法に通じたといはれてゐる人間の食事状態であるか。また他方に、なんたる悪料理よ。無味で水つぽい。考へて來ると、私は外形的西洋文明の移植位無用なるものは無いと思はざるを得ない。完全にそれを咀嚼し得るには百年もかかるであらう。此處に主として私に關係する問題は、料理上日本人の趣味が如何に凋落したかといふことで、それは永遠に恢復されざるものであらうか。然り、恢復されまい。私は叫んでいひます。

『今日の我我は中世紀の野蠻状態に歸つた 西洋料理に面するといふことは無意味です。また料理人その人も決して食事する人間以上に善ありません。』

足の音楽家

三田文學記者足下。私は日本の女(何んなにこの言葉が微妙に響くでせう!)を比喩譚ヒョウタンの一種と見る古い頭の西洋人であります。西洋人の頭は古いといふことを私は日本の『新人』から聞かされました。實際私共の頭は古い。云ひ換へるとロマンチックな憧憬を打切ることが出来ぬ私の頭には、日本の女、(再び私は云ふ『何んなにこの言葉が微妙に響くでせうか!』) 傳統と追憶の塊、舊藝術の模様式表現と映じます。——日本の女は一種の表象シンボであります。何故に日本の女を表象であるかといふに、我我人間の本能(何う日本人が説かうとも、西洋人の本能も日本人のそれと大差はありません)がいつも渴想する美の夢幻のやうに見える

からであります。アレゴリーとシンボルとが日本の女（三度私は云ふ『何んなにこの言葉が微妙に響くでせう！』の小さい花車な肉體に一つとなつて溶解して居る所に、私は『新』と『舊』の抱合、『死』と『生』とライトとシャドウのやうに複雑に入り交たつ意味を發見します。私が日本の女は麗はしい色彩の圖案と見える頭から足の爪先まで嘗めて遣りたい位な人形のやうに見える、さういふ日本の女は恰も魔の翼を張つて飛ぶ蝶蝶のやうに跳るといつたならば、日本の所謂新人は『こいつ古い頭の西洋人よ、馬鹿な寢言は止めて呉れ！』と呶鳴るかも知れません。だが私は喜んで呶鳴られて居りませう。私は大阪の人形芝居を見まして、一片の土塊が急に生命を得た、嚴格にいふと奇異に混合して居る死と生の表現から不思議な感覺に撃たれました。して私は同じ不思議な感覺を音樂に連れて踊り廻る幽霊のやうな日本の女（四度私は云ふ『何んなにこの言葉が微妙に響くでせう！』の實際から感ぜざるを得ないのであります。最も自由で暗示的に見える日本

の女の姿を指摘しようならば、私は白く大きく文字を染め抜いた眞黒な暖簾の掛つた商店の前を彼等が内股にちよこちよこ歩いて通る時を擧げませう。また私は提燈のとぼつた夏の夕方の軒の下で巫山戯られて白い手で着物の裾を抑へ乍ら通る時を擧げませう。（私は實際日本に女の着物改良——改良でなくて改悪——を説く愚物のあるのを悲みます。）日本の女が一番麗しい存在の美を發揮するのは街上に於てであります。見給へ、坦坦たる敷石に駒下駄が撃出す音樂につれて振る彼等の肩の楚楚たる姿を！音樂の導くままに彷徨ふ幽霊が幸福な感興を追掛けてゐると評することが出来ます（前申すやうに私は古い頭のロマンチックな西洋人です。）私は町を歩く日本の女を見ますと、何うしても彼等を二十世紀に結びつけ、云ひ換へると科學的な冷やかな人生の目的などといふものに結合させて考へることが出来ぬのです。私は唯彼等の移り氣な無責任な『彷徨の情とでもいふ心持を考へて喜ぶものであります。彼等は刹那の空想的逸樂を満さんが爲めに黄^チ

昏の王國からこの世界に歸つて來た幽靈ではあるまいかと私は時折思ふことがあります。私は繰り返して云ひます。私は古い頭のロマンチックな西洋人であります。して私は日本の新人などと肩を並べて文學を談ずる資格がないのを自覺して居ります。

日本の女が幼少の頃から重い大きな下駄を穿いて、知らず不知足で音樂を奏する呼吸を習ふのを私は愉快に思ふ西洋人であります。誰が日本の女は音樂の聾者だと云ひますか？ 彼等が下駄で彈ずる音樂は表象的であるといふのが私の意見です。と云ふのは、彼等はいつも子供心の記憶を持つて居る。不變に年若い近代の言葉を用ゐると單純の愛を彼等は下駄の音で暗示するからであります。日本の音樂は或る程度までは進んで居るが嚴格な意味からいふと決して高い音樂でありませぬ。だが所謂高い音樂と進めるのを希望せぬ所に、日本人が眞實な音樂の愛者であるといふ證據を持つてゐると私は云ふのであります。我我西洋人——少

くも私自身は——無茶に混雜した自國の音樂に對すると非常に頭を苦しめられて亂されて、急に十も年を取るやうな感じを持ちます。私の親愛なる街上の音樂家なる日本の女よ。彼等のあるものは高く彈ずる。彼等のあるものは低く奏する。『足の音樂家』なる彼等の性情如何でその音律は千差萬別である。實際音樂の響き工合一つで駒下駄の所有者の醜美老若さへ見ずに語ることが出来るかと云つても過言ではありません。足音で自分の戀人或は女房の來たのであるか無いかを感知することの出來ぬやうな鈍な日本人は日本に一人もありません。私は思ふ。日本人が音に對する敏感は驚くべきものであると私はいつも驚歎して居ります。

私は西洋即ち自國の生活に疲勞し切つて、東洋の日本を理想境と思つてはるばるやつて來まして初めて日本の横濱に着し、横濱の停車場で聞いた『足の音樂家』の伴奏！ 何うして私はその日本の女の駒下駄の響から得た最初の印象を忘れることが出來ませう。急ぎ足の女連が停車場構内の敷石に撃出した駒下駄の音樂！

私は東京への列車内でその音楽を持つてゐた日本國特有の單調單純な叫聲を考へました。今日でも眼を閉ちてその當時（さう、もう十五六年以前であります）を想像いたしますと、一種の悲哀——幽靈のやうな薄暗い音楽の悲哀がしみじみ身に迫つて來るやうに感じます。それを譬へると、秋の長夜を愛戀にもだえ泣く虫の寂しい灰色の聲といふことが出来る。嗚呼日本の女（五度私は云ふ『何んなにこの言葉が微妙に響くでせう！』の心に宿る寂しい灰色の悲しい音よ。その單調その單純はあらゆる外面的色彩を犠牲にして初めて得たもので、一番高尚な祈禱とでもいふことが出来る靈的禁慾主義が極致に達したものであります。確に日本の女の心は最早その最後の進化期に到着したものでありませう。何處に寂しさに勝る神聖がありませんか。何處に灰色に勝る高尚な色がありませんか。私は日本の女の歎美者であります。古い頭のロマンチックな西洋人は皆さうであります。

三田文學記者足下。私は徒然草に麗しい女が嘗て穿いた下駄から出來た笛を吹くと澤山の鹿がよく集つて來ると書いてあるのを讀みました。ある日私は街上で女の駒下駄の片方を口に啣へて愉快氣に飛廻る瘦犬一疋（犬ばかりで無い、瘦せたものに熱情家が多いのは事實であります）を見ることがありました。が、此事に私が特種の意味を附加したならば人は私を空想の狂者といふであります。然し——駒下駄でも、それを履く女次第で如何様にも人情化させることが出来るのは事實に相違ありません。隣れた駒下駄は美麗な女に履かれて擦り切らされて人情の悲しい嬉しい身震ひをぞくぞく感じ得ることが出来ると思像するのは詩的であると思ふ。駒下駄は生物である。再び私は云ふ『女の駒下駄は生きた聲を發する樂器である。』さういつたからとて詩と幽靈の日本國なれば必ずしもインポシブルな言葉ぢやありませんまいと思ふ。日本の女の持つて居る下駄に向つての愛著心の美を歎美するものは………この古い頭の西洋人であります。

日 光

好憎無差別は日本の舊態度の最も高尚なものと云はれて居るが、日光廟に對しては斯る中立的態度を保ち難い。黄金を鏤はめ朱塗で殆ど野蠻に近い程の日光の壯麗は、詩的な奥ゆかしさが無く、想像の興味や寂寞の觀念を吹き込まぬ、日光に對しては好きか又は嫌いか、賛成か不賛成かの一あるのみである。極點まで明確な日光の表現は私の不定な情緒を少しも動さないのです。そりや腹一杯鱈腹食べて、囊中も空しからず、物質上の満足を謳歌し得る境遇の人には日光の專制的な富も餘り威壓的には見えませう。又人間努力の最後の功價として、日光の永遠の美を歌ひたいと思ふに至りませう。私自分もさういふ心の状態であつたこと

もあると信じてゐる。併し別に批評の必要な場合で無いのに批評的になりたがる悲觀的な心の男で、物質的表現を見るを肯ぜない精神的交通に大なる興味を有つてゐるものには、此の日光は美術品として如何にも素人臭いもので、どう良く見ても藝術的浪費者のアポロジューとしか見えぬ。藝術の世界で空しく力を費すことより不愉快なるは無い。最も大で最も高い藝術は何物たるを問はず節儉の美德を供へてゐる。私思ふに、死者に向つてその靈屋を作るのは元來日本人の眞實なる觀念ではない。死すると直に大自然に托して樹木山川、風や影や、鹿や鴉や、狐や狼や、熊やの仲間入りをさせる。そして太陽や月やの看守の下に残して置くのが日本人もとの思想ぢやあるまいか。實に死した灰色の原素に返へるのを恐れて、物質主義の裡に隠れ所を求めようとした臆病な無教育な武士が殿宇建築を工夫したのである。又更に實質に近い説明をするなれば、死者の靈屋を作るといふことは、佛敎に全く服従し終つたのに基いてゐると云へませう。さう云つて來

ますと、倫敦や紐育は東京から始まつて居るとも云へると同理由で、印度は此の日光から始まつてゐると云へる。研究して見ると日本歴史中、日本が絶對的に外國の影響を受けずに、獨立であつたのを説明する幾頁があるのでせうか。幸であるか不幸であるかは知らぬが。私の心は近頃段々と變化して來て事實其物を見なくなつて、私の喜ぶ所のは事物の心理的關係の上を回想することである。今神聖なる日光廟の地内を散歩し乍ら鳳凰や牡丹を彫んだ門、或は金や赤の五重塔が、對照の結果として周圍の山川老杉天空が皆な一層青く見えしめるし、又壯麗な殿宇に對して人間の靈も一層切實に感ぜられて來るのを私は此處で感謝致します。私は五月の半ば、過ぎ去る春の苦痛を感じて自然も嚴肅になる期節に日光へ來たのを幸とする。初夏で、希望の胸から流れ出る太陽の光線は如何にも日光の自然を青く豊かに、如何にも壯大に見えしむので、日光を完全に賞するには最も好期節である。日光の美は實に殿宇其物よりは自然の青色にあるのである。即ち天を突

く杉の木又矢の如く流れる水の美である。そして諸君は如何に野蠻的壯麗を極めた人間の勞作でも大自然に對すると直に靜寂に歸へることが出來、又更に嬉しいのは、自然と人力とが相互に友情的關係を保つて、此處日光といふ一箇完全なる美術を作り上げてゐる事實を目撃すると必ずや人生を悲觀せざる可しと思ふ。私は日本の庭師が、都會の小園庭に於けるばかりで無く、斯くも大規模にその技倆を用ゐることが出来る生きた證據を見て喜びました。最初家康公の廟では藝術上の一致を缺いて居る位、餘りに複雑なので私の心は少からず悩まされたけれども、間も無く三代將軍家光公の廟に、最も麗しい藝術的整齊を見て私元來の平靜を回復しました。此處に溢れて居る嚴肅の穩和な感じは古い懐しい星のそれに似てゐる。何んたる高貴で靜寧な壯麗よ。此處の布置は注意に注意を拂つて飾り付けられた寶石の婦人美に比較されませう。『御手洗鉢』の前に立つて遙かに廟宇を見上げた時、私は私の幼少の頃持つてゐた扇子に描いてあつた夢の殿堂なる龍宮

のことを想起しました。又大きな仁王が番をして居る山門の上から下の方の『御手洗ひ鉢』を見下すと、何んだか詩歌の靈が太陽の光線に乗じつつ浮動してゐる如くに感じました。此處へ來ますと誰か次の發句を書いた芭蕉翁の如くに、五月の自然に對する熱心なる賞讃者とならないものがありませう。

『あらたふと青葉若葉の日の光』

私は何故に家康公が黄金朱塗の殿堂から逃れて、廟後の小山に安眠す可く希望したかを了解してゐます。讀者諸君私は今、番兵の如く肅然として居る百の杉樹を通つて、家康の靈に揖禮を拂はんが爲め、高い長い石の階段を登りつつあるのである。何等の平和境！沈黙を破る所のは唯水の聲と讀經の聲 鳴く鳥の聲のみ。ここ暫時の生命を食つて直ぐ消え失せる人間の如く、三つ四つ二つ鳥が飛んだかと思ふとはや不見の境に入つて仕舞つた。見ると私の足元に毛だらけの小さい毛蟲一疋、私の如く石段を登つてゐる。私に語れ汝は誰。我我人間と毛蟲

との差別果して如何だ。其間の差別餘り重大なるものではあるまい。我我人間は少しばかり長命する毛蟲たるに止つて居るぢやないか。私は石段の中央で、急いで降りて來る西洋の旅客の一群に遇つた。私は昔時家康其他日本のネロ大王共が實行した基督教反對の暴政を考へました。昔は昔、今は今、彼等は安眠の裡で一時は嫌ひに嫌つた西洋人と握手してゐるのである。

山高ければ天候の變化は激しく、今や急に空模様が変わつて、雨さへ降つて來さうである。私がふと憶ひ出したのは、私が十三年前紐育で告別した時に於ける一友人の言葉です。その人は著名の畫家で、その畫家はずつと以前に日本を漫遊して此處日光で永らく滞在して各所をスケッチしました。彼は私に語りました『大谷河畔數多き地藏様が起つて居る。その中に親地藏と呼ばれるのがあつて私は之れを愛しました。見よ、男體山は其等の地藏様の後に、宛も霧の一握みか、或は蜃氣樓かの如く見え隠れに起つて居る。如何にも詩的の場所である。地藏様達は

身體一杯苦むして居るからには、不愉快極まるげに見えた。苦むして居るばかりで無い、道者共が訪問の印として紙の汚ない断片を地藏様の身體に貼り付けてゆくのである。一度私は中禪等から降つて此處を通行の際中、風雨に遇つたことがあつて、私は是等の神聖なる佛様同様びしょ濡れになつた。私は彼等を憐れと思ひました。私は今日でも彼等の悲しき雨中の光景を忘却することが出来ません。雨中の地藏、如何にも好い畫題である。日本の如く多く雨降る國は他に無い。今此處で君と僕とかう談話して居る時でも日本の日光では、大谷河畔の地藏様は雨に濡れて居られるかも知れぬ』

私は私の旅館に歸つて、座蒲團の上に坐つて巻煙草を燻べ初めました時、私は雨中の地藏から曳いて、想像を失敗で濡れた人生の問題の上にめぐらしました。私は此れや彼れや、又彼れや此れやの種種多のことを回想しました。私は桑港を後にして日本へ歸つた時、十三年前です、彼地の新聞記者が、私を愕然と喫驚せし

めた言葉を吐いたが私はそれを忘れることが出来ません。彼の言葉は愚昧の然らしめた所であつたか、はたまた知識から發したのか知らぬが、私が彼に日本へ歸へる事は涅槃ニルバナを探検する爲めであると答へると、彼は妙に笑つて私を見上げて云ひました、『涅槃ニルバナ探検ですつて、もう少少期節後れではありますまいか。』

如何にも桑港の記者の言の如く、日本でも涅槃ニルバナを追求するのは最早や時後れであります。私が倫敦や紐育で得られぬ涅槃を、日光へ来たからとて得られる道理のものでないやありませんか。私は場所さへ變れば得られるものと思つた私の愚鈍を嘲笑しました。嗚呼私の心、何時汝はもつと伶俐に成長し得るであらうか。

林檎一つ落つ (をばり)

附録
ヨネ・ノグチ論

アーサー・ランソム

支那の哲人莊子が自分の胡蝶であつたのを夢見た。目醒めた瞬間に自ら問ふた言葉に、『汝は果して胡蝶であつたと夢見た莊子であるか、或は莊子の夢を見つたある胡蝶であるか。』此の問題は、二箇の世界に自由を持つてゐてその何れの世界にも随時に現實を發見し得るヨネ・野口の作品中に堪へず繰り返へされて居る。野口は常に自分の存在を疑ひ、外見を信ぜず、感觸或は描寫以上の物中に現實を追求して居る。彼は『私の靈』に書いて居る。

"My soul, like a ehilly-winged fly, roams about the sadness-walled body,
hunting for a casement to fly out.

Lo, suddenly, an inspired bird flies upright into the atom-eyed sky!

Alas, his reflection sinks far down into the mileless bottom of the mirroiry
revulet!

Is this world the solid being?—or a shadowy nothing?

Is the form that flies up the real bird? or the figure that sinks down?"

私の靈は、羽の凍えた蠅の如く、飛び出す窓を捜しつつ悲哀の壁の身體のなかを彷徨ふ。

見よ、靈感を得た鳥は、急に原子の眼をして居る大空へと驀地に飛ぶ。

ああ、その鳥の影は鏡なす小流れの里數限り無い底のしたへと遂かに沈む。

此の世界は堅實なる物體であるか、或は影に似た虚無であるか。空へ飛ぶ形、或は沈み下る姿、その夫れが眞實の鳥であるか。

そして再び野口は書いて居る。

"The world is not my residence to the end!"

Alas, the moon has lost her way, harassed among the leaf-fellows on the darkling hill-top!

Isn't there chance for my flying out?"

此の世界は最後まで私の住所で無い。

ああ、月は、暗い山上の木葉の群れに悩まされてその進路を失つた。

私の此の世界から飛び出す機會は永久に有るまいでせうか。

我々の國語で書く此の日本詩人に對して此の世界は餘り多くのもので無い。又自覺せる表象主義の國民の一表象主義者と、無自覺ではあるが殆ど一般的な實行を詩の理論に向けた英佛の詩人數名との比較論は興味あるものでせう。

(附記。私が此の文を草した時には、所謂表象主義者彼等自身の如く、表象主義は一種の

方法であるといふ思想の催眠に依然として捕はれてゐた。私のその後の文『動的と伏能的言語』Kinetic and Potential Speechには、世に『表象派の文學運動』と云はれて居るもの特質に對する、私の最も精確な述説が含まれて居る。表象派の文學運動は詩の上に於ける實行を理論へ向けたので無く、唯、詩の言語として動的と伏能的の兩言語が組附けられた場合、其一を力説して、語らない言語則ち他の一方を暗示したに止つて居る。

日本人は詩は言語の伏能的分子を固執せねばならぬとして、常にその緊張の度合が則ち詩の試験であるとして居る。野口は偶々英國語で作詩する日本詩人であるといふことは、彼は依然として長い日本の傳習の相續者で、必ずしも革新者ぢや無い。

斯く云つたからとて、私が野口を尊重するに當つて、彼は無形で空中を浮動する仙女（一見殆どさう見えるけれども）であると思つてはならぬ。彼は芭蕉の即興を借りて云ふ。

"I have cast the world"
And think me as nothing.

Yet I feel cold at snow-falling day,
And happy on flower-day."

ヨネ・野口が米國へ渡つたのは彼の二十歳前で、彼は二三の日本人の學生と一緒に（無經驗の人には靈の刺戟には有效と誤解されて居る）貧と飢餓とを極點まで嘗めた。彼は米國の作家の中に友人を得た。彼は一時オウキン・ミラーの山莊で宿泊してゐたこともあつた。千八百九十七年に彼は處女詩集『見界不見界——家無き^{モノロウグス}蝸牛^{ラフ・エ・ホームレス・スネール}の獨白』、その翌年に『溪谷^{セウオイスラフ・セシバ}の聲』なるヨセミテの溪谷から靈感を得た小冊子^{ラフ・エ・ホームレス・スネール}を出版した。彼の英國へ來たのは千九百〇二年で、プリキストン（東京でいふと本所の場末）の安下宿で牧野義雄と一緒に住んでゐた。此安下宿屋から彼は鶯色の紙に印刷した十六頁の詩集を出した。此の詩集は多大な注意を引いた結果ユニコン・プレス（この不幸な小出版店はある非常に良い書物とある悪い書物を出版して遂に死んだ）が野口が自費出版した小冊子と同名即ち『東の海より』

で、小冊子の十六頁の外、米國版の彼の詩集から抜いた詩と新らしい詩とを加へて出版するに至つた。ユニコン・プレス出版の詩集の表紙は牧野君の意匠する所であつた。私が野口を知つたのは此頃のこと、夕景、彼の句を借りて云ふと『人を麻酔せしめる霧の裡に浴して居る蛛網の様な街の燈火』のもとで、テムス河畔を屢屢一緒に散歩したことがあつた。私の記憶して居る所に依ると、彼は——恐らく日本の標準ではさう小さくも無からうが、我我の眼には小男で、普通日本人の髪の毛よりは不秩序で不幾何學的な黒色の髪、額は高く眼は大きく落ち込んで口元は涙に近い感情をぢつと堪へて居る女のその如く、非常に覺性の鋭い顔を持つてゐた。我我は其頃は殆ど一文無しで、巻煙草の先きから煙草を絞り出してそれを他日の用に供したのであるが、その巻煙草を挟む指先きの工合にも、一種花車な所があつて、彼は普通よりはもつと優雅に生活してゐた點を我我は認めざるを得なかつた。彼の會話は詩——彼の書かうとする特種の詩の理論と、彼が讀んだ

英詩人の作品に關するものであつた。彼は云つた、『自分はロングフェローを嫌つてキーツを愛す』斯く二詩人を對照せしめる裡に、彼は彼自身の重要な傾向を釋義したのである。

彼は千九百〇三年に倫敦を去つて、紐育へ向つて、それから日本へ歸つた。千九百〇六年に東京で『夏雲』^{ゼンマー・クラウド}を出版して、其後上下二卷の詩集『巡禮』^{セシル・グレイム}を公にした。此の最後の詩集は英國ではエルキン・マシユウスが出版する所となつた。

之等五冊の詩集は分量としては大なるもので無いが、我我の興味がその作者の國籍を中心點を持つて居らぬ所の作品を含んで居る。ブリキストン・ロードの安下宿屋から彼が出版した蔦色の紙に印刷した小冊子の表題には、『日本人ヨネ・野口著東の海より』と書かれてゐた。併しそれが最初は不注意な好奇心を引いたけれども、直にその好奇心は彼の作品が持つてゐた偶發的ならぬ實質の力でもつと高價な或る物と變ずるに至つた。野口の詩の幻像は、日本人の感情であるのは、丁

度なほシングの劇のそれが愛蘭のものであり、又ヴェルレーヌの詩のそれが佛蘭西のものであるが如しである。併し此の三人の場合何れに於ける幻像が、單にその作者が日本人であり愛蘭人であり又は佛蘭西人であるのみで、生潑刺たる呼吸で自由ならしめた言語を操縦する天賦の才人でなかつたなら無價値のものでありませう。我我の問題とする所は此の作者の國籍の上には無くて、彼が詩人としての觀念とその詩の上にあるのである。

野口はその處女作を千八百九十六年に出版して居るから、アーサー・シモンズの『表象主義の文學運動』（The Symbolist Movement in Literature）を読んでゐなかつた。シモンズの此の書は野口の處女作より三年後に出版されたものである。野口はシモンズの書中に自分に酷似した幾多の詩人と、キーツが自分に對するよりはもつと自分に接近して、キーツが彼の嫌うロングフェローと遠ざかつて居るよりはもつと遙かに遠ざかつて居る詩歌を發見したのでありませう。

シモンズはヴェルレーヌに關して云つて居る『彼の全藝術は、全き信用を以て情調に對する精細な伺候（ウエチング）ぢやあるまいか。この情調を阻礙するのが普通教育の大部分であり、又それを抑制するが人間經驗の大部分である。然るに幸ひにもヴェルレーヌに對して經驗は何物をも教へず、寧ろ我々の精神生活のより親密な部分は情調の連續に懸つて居るが、ヴェルレーヌの經驗は彼に其等の情調に更に近く愛着するやうに教へたのである。』野口は殆ど絶えず其等の情調の裡に生活して居る。經驗は彼には堆積的であるよりは寧ろ瞬間的である。彼は一度ならずその詩で表示して居るが、彼の目的は出来る丈け器を透明に保つて、人生の鉢（ボウル）から藝術のそれへと其等の瞬間を自由に清く遷移せしめるに有る。彼が理想の詩人の姿を、彼の詩から想像するのは難事（セキヤク）で無い。『詩人』の中彼は書いた。

“The roses live by the eating of their own beauty and then die.

His song is the funeral chant for his own death of every moment.”

薔薇は自分の美を食つてそして死ぬ。
詩人の歌は各瞬間の死に對する葬式の吟誦だ。

又彼は自分を歌つて、

"I sing the song of my heart-strings, alone in the eternal muteness, in the
face of God."

私は神の面前で永久の沈黙の裡で獨り、心の絲の歌をうたふ。

して又、

"The God-beloved man welcomes, respects as an honoured guest, his own
soul and body in his solitude.

Lo! the roses under the night dress themselves in silence, and expect no
mortal applaud—content with that of their voiceless God."

神に愛いとくしまれたるものは、客人の如くに、その靈と身體を孤獨
の裡に迎へ敬ふ。
見よ、薔薇は夜暗にも黙して自らを装ひ、何等人類の稱揚を期待
せず、聲無き神のそれにて満足する。

而して又、

"O, wash me and wash me again with thy light,
And burn my body to a flame of soul!
It is this moment that I conquer the intervention of flesh,
And its rebellions that worked in me at unexpected time.
It's not too much to say I am a revelation or a wonder,
Winging as a falcon into the breast of loveliness and air."

あま、汝の光明で私を洗ひ又洗ひ、

私の身體を燃やして靈の焔たらしめよ！
此の瞬間に、私は肉の干渉と
私かに動く豫期せぬ謀反に卒然と打勝つ。
私は啓示、私は驚異(かう云つても過言であるまゝ)
空氣と愛の胸をさして鷹の如く飛翔する。

而して又、

.....What a bird

Dreams in the moonlight is my dream,

What a rose sings is my song.

.....鳥が

月光の中で夢みる所のものが私の夢で、
薔薇の歌ふ所のものが私の歌です。

彼は叫んで云つた。『おお世界を失つて、歌を得ることよ。』『今日こそは、海の
靈の笑ひと踊りを以て、私は非人間であるのを喜ぶ。』彼の思想は『彼の雪の様な
紙の頬の上に』秋の木葉の如く落つるのである。彼の詩は世界と自分を同一視す
る所謂自己拒否の詩である。彼の靈は、彼の句に依ると、『雨の銀線の上に』舞ひ、
『自分と鳥、相互にその傳記者たるのを喜ぶ』と彼は歌つて居る。彼は、地上を
歩み聖哲の言説を以て誇るものを動かさない風の力で、風の如く空中に飛躍し又
降るのである。

彼の最後の詩集の巻末に、日本で所謂發句の數例が擧げられて、野口がそれに
關して書いた小文の中に、かう云つて居る。『斯かる小さい詩は、私は敢へて云ふ、
その背後に全空中を擔つて居る小さい星にも比較され可きものである。それから詩
の王國に入り込むことが出来る僅かに開かれた小さい窓の様でもある。その價値は
如何に多く暗示するかで決せられる。發句詩人の重なる目的は彼が住んで居ると等

しい詩的空氣を讀者に與へんとするのである、『思ふに發句詩人は、野口同様、彼が書きつある所のものを決して書くのぢや無い。彼が表現せんと冀ふ感情はただ行間の空處スペース、セトウキョウ、ゼラインスに於てのみ書かれ、宛も花瓣の間に吾人が花の嘗て夢みたことの無い夢と、花がその根を横へて居る大地よりはもつと輕ろらかに或る物の暗示を發見する如しである。發句的英詩の例として野口は書いた。

“Where the flowers sleep,

Thank God! I shall sleep to-night.

O, come, butterfly.”

花の眠る所で、

神に謝す、僕が今夜眠る所だ、――

來れ、胡蝶よ。

此の詩は繪畫としてよりは寧ろ一種の呪符マジックとして價值がある。感情の酒の裡に

溶解された眞珠である。眞珠は酒で無い。又飲まる可きものと考へられたことは無い。然し眞珠が溶解された酒中には一種の妖術がある。

野口の詩には沈黙と言葉の合同協力がある。カーライルはこれに關してかう書いたです、『表象の裡には隱匿と啓示がある。沈黙と言葉が共に働くに於ては、此處に二倍に著しい趣旨が顯はれる。言葉自身が高雅で、それに添ふ沈黙が適當であり高尚であると、其の合體が如何に意味多くなるだらう。』佛蘭西表象派の數多き詩には、諧調を以て蔽はれた沈黙の裡に於ての外は、言葉は殆ど無意味である。野口の詩に於ては、人生の稀れに幸ひなる情調に於てのみ發見せられる魔力が彼の言葉と沈黙のうちにある。彼は書いた、

“I am stirring the waves of reverie with my meaningless but wisdom-wreathed syllables”.

私は意味無く而かも知識を纏つて居る字音で、夢幻の浪を動搖させて居る。

併し彼は沈黙の注意深く言語づけられて居る伴隨 (the carefully-worded accompaniment of the Silence) の上に彼は特種のチャームを持つて居るが、彼はそれを否定することが出来ぬ。彼は世界を偽心無い眠で見居るから、彼は作詩の上インヴェーションとして取扱ふ場合でさへも、世界が生き生きとして来る。彼は思想を見ること頗る明瞭であるから、讀者に對してその思想が、獨立的生氣を發して来る。その一例として次ぎの繪畫^{ピクチャー}を擧げる。

252

"Alas, the mother cow, with matron eyes, utters her bitter heart, kidnapped of her children by curling gossamer mist!"

さても親牛は、巻きのぼる陽炎の霧で子供を誘拐されて、心の痛

みを叫ぶ。

もう一例を擧げると、

"The Universe, too, has somewhere its shadow; but what about my song?
An there he no shadow, no echoing to the end——my broken-throated lute
will never again be made whole."

253

宇宙も何處かでその影を投げて居るだらう。然るに私の歌の影なる反響は!

最後に至るも何等の影無く、何等の反響が無いとしたらば、——咽喉の破れた私の琵琶は二度と完全にはなりませんまい。

彼はその焔が微かな呼吸にも飄搖く精細な表白の詩人である。彼は日光と陰影の雑多な結合の如く數多き情調を持つて居る。彼の詩は實際彼に情調を誘つたも

のの聲で、結果として自然其物と野口が感ずる純白に高踏せる心との中間なる或物に彼の詩は顯はれて居る。此の蒼白い焔の様な感情の素質が彼のあらゆる彼の詩に行き渡つてゐて、驚く可く種々な姿となつて居る。
時としては彼は壯調に次ぎの如く語つてゐる。

“When I am lost in the deep body of the mist on a hill

The Universe seems built with me as its pillar!

Am I the God upon the face of the deep, my deepless deepness in the beginning?”

私が山上で、深い霧の裡に失はれた時、
私とその柱となつて、宇宙が造られて居ると思はれた。
私は天地創成の初め、深さ、否な深さの無い深さの面に起つた神
ぢやあるまいか？

時としては思ひに惱むら。

“Alas, my soul is like a paper lantern, its paste wetted off under the rain.
My love, wilt thou not come back to-night?”

Lo the snail at my door stealthily hides his horns

Oh put forth thy honourable horns for my sake! Where is Truth? Where is
Light?”

さても私の靈は、雨に濡れて糊のはれた紙提燈のやうである。
私の愛は今宵は歸つては来ないだらうか？
見よ、門口に蝸牛は竊かにその角を匿した。
おお私の爲めに名譽ある角を出せ！真理のある所は何處か？ また
何處に光明はあるか。

時としては、

"My poetry begins with the tireless songs of the cricket on the lean
gray-haired hill, in sober-faced evening.
And the next page is Stillness—
And what then, about the next to that?
Alas, the God put his universe-covering hand over its sheets!
Master, take off your hand for the humble servant!"
Asked in vain:—
How long for my meditation?"

256

眞面目顔なる夕、灰色の髪した瘦せた小山で、疲れを知らぬ蟋蟀の
歌が始まると私の歌が始まる。
そして私の歌の第二頁は静止の章——
して、またその次ぎの頁は何んでせう。
ああ、神様は宇宙を蔽ふ掌をその本の紙面の上に載せ給ふ。

主よ、此の憐れなる僕の爲めその掌をのけ給へ。
私の問ひは無益であつた——
如何に長く私は物思はねばならぬか。

一文中に許され可き引用で以て、斯くも我我と異つた詩人を相當に照會せんと
するのは極めて難事である。百の詩の例を出しても十分で無い。野口はヴェルレー
ヌの如く、經驗の知識から逃れた。彼の近頃の情調はその初めに於けると等しく
大空の如く明瞭である(作詩上の技工と感じの上に於ては違つては來たけれども)
彼の情調の各各は金剛石の放つ一閃光である。其等の數多き閃光を一つに見るに
於ては、金剛石それ自身を満足に認知せざるを得無いことに成るのである。

彼を影響した過去の詩人を發見しようとするれば出来るけれども、彼の技巧は彼
自身獨特のものである。彼はシングがその散文を像どつた愛耳蘭の百姓の談話
が持つて居る異常な大膽と等しき大膽を以て英語を用ひる、彼はまた英語を愛戀

257

した外國人の如くに英語を用ひる、そして彼は、凡ての祖先が不具にした言葉を以て産れた本國人より遙かに新しく不思議な曙の新鮮を、彼の用ゆる英語に與へ得るのである（凡その善良なる作者の言葉は常に新しく發見せられたものである筈だけれども）。野口は英語を長短の行に分けて用ひ、彼の近年の作品では音律に關して多くを學んで居る。彼は遂に脚韻を踏んだことがない。恐らく之れは思想から思想へと飛ぶ彼の詩の胡蝶的自由を阻礙するからであらう『夏雲』の中の幾多の詩は彼の初期時代の詩をその詩集から轉載したものであるが、元來行を分けて詩として公にしたものを、此處では一緒に連續せしめて散文の形式を取らして居る。如何なる動機で野口はこの企をしたのであるか不分明であるが、不規則で破れて居る彼の詩句（その形で彼の詩の大部分は顯はれて居た）は、言葉の齷らす效果に眞實なる力を持つて居るのである。行間の空處は一種思想の句讀法ともなつて、彼の詩を作つて居る小さい、息切れせる、言葉少い歎息と歎息との間に

吾人は之れ等の瞬間を是非共要するのである。彼の詩を高聲で讀むと、コンマヤフル、ストップよりは此の行と行とに間を置くといふことが、もつとも必要な儀式であるのが明瞭になつて来る。野口の歌は羽翼で間を作つて飛ぶ鳥の様である。彼の理想とする所は純白な暗示である、暗示の諧調は思想の諧調で、その思想の幻想不定なるは彼の心の姿で、彼の心の幻想、彼の心の不定を持つた思想の諧調を舍む暗示の詩が即ち彼の詩である。次ぎの詩は『夏雲』では散文として印刷されて居るが『順禮』の中で發見する所に依ると、

“Little Fairy,

Little Fairy by a hearth,

Flight in thine eyes,

Hush on thy feet,

Shall I go with thee up to Heaven

By the road of the fire-flame?"

Little Fairy,

Little Fairy by a river,

Dance in thy he art,

Longing at thy lips,

Shall I go down with thee to Far-Away

Rolling over the singing bubble?

Little Fairy,

Little Fairy by a poppy,

Dream in thy hair,

Soitude under thy wings,

Shall I sleep with thee to-night in the golden Cup

Under the stars?"

小い仙女、

爐邊の仙女、

お前の眠には逃走、

お前の足には静黙、

私はお前と焰の路をたどつて、

天國へのぼらうか。

小い仙女、

河畔仙女、

お前の胸には舞踊、

お前の唇には憧憬、

私はお前と歌ふ水の泡をころがつて、

「遙か向う」へ降つていからうか。

小い仙女、

罌子粟の花による仙女、
お前の髪には夢、
お前の羽のもとに孤獨、
私はお前と星の下で、
花の金の杯の中で今宵眠らうか。

此の詩を聲高らかに讀むと、その詩形は決して偶然のもので無く、一句は一句皆な作者の心のムーブメントに従つて出来たものであるのを容易に知ることが出来る。

併し乍ら誰が蛋白石のチャームを分析し、又その色彩を分類する事が出来るか。野口の書くのは詰り其詩自身をして語らしめるより他に方法がない或る物を書くと同じである。私はただ彼が紡いた陽炎の衣から一切れ一切れを諸君の面前に提供して、かかる數百の切れ切れが彼の作品中にあるのを保證することが出来る。

『順禮』の挿繪として歌麿の美人畫が入れてある。これは四種の色と、墨、ひと撫での數線で出来て居る作品で、その輕きこと風の如く、天空の星の群れが崇拜の物象を圍繞して歩む軌道の如く微妙で説明以上のものである。それは一婦人の畫であるが。その畫の性質如何の重要ならざるは尙ほ野口の詩の題目が重要ならざるが如しである。私はこの歌麿の畫を見つつ單にその書題ばかりで無く、野口の詩集も忘れる。何となれば此處に藝術がある、その藝術は、ヴェルレーヌにせよ、ヨネ・野口にせよ、歌麿にせよ、ウキスラーにせよ、その自由の力で我我を解放して、我我を餘りに現實なる世界から逃れ出でしめて、我我が小兒たるにあらずんば入り込むことが出来ぬ。かの夢の世界を探検せしめるからである。

"Beckoned by an appointed hand unseen yet sure, in holy air,
We wander as a wind s'ilver and free,
With one song in heart, we, the children of prayer."

Our song is not of a city's fall,
No laughter of a Kingdom bids our feet wait;
Our heart is away with sun wind and rain:
We, the shadowy roamers on the holy highway.

聖なる空、眼に見えねど確かに、神の御手に招かれて、
我等は銀色自由なる風の如く放浪する、
胸には一の歌を蓄へ、我等は祈禱の兒童。

我等は都城の亡ぶるを歌ふのでない、
王國の笑は我等の足を止まらしめなく、
我等の心は遠く、太陽、風雨を友とする、
我等、聖なる大道に於ける影の放浪者。

(完)

版 權 所 有



大正十一年四月十二日印刷
大正十一年四月十五日發行

林檎一っ落つ

定價貳圓五拾錢

著 者 野 口 米 次 郎

東京芝公園九號地

發行者 長谷川巳之吉

東京芝公園九號地

發行所 玄文社詩歌部

振替東京一四一七七

所 刷 印 同 共 所 刷 印

二重國籍者の詩 野口米次郎著

我國語にて書れたる著者の第一詩集である。著者の名聲が我文壇に傳へられて以來、既に廿五六年になる。けれども直接氏の英詩に行くものが少かつた爲め我々はただ海外に於ける氏の偉大なる名聲を聞いて驚くのみであつた。氏は廿歳の時に、處女詩集を米國で出版した。其評判は海外に鳴り渡つて「偉大なる天才うまれたり」と云ふ激賞湧が如くであつた。而もロセチ、ハアデー、ゴスの諸文豪は口を極めて氏の作を賞讃した。氏は其榮譽をになひて歸朝以來十八年、依然として歐米文壇の詩人として活躍してゐる。本書は「林檎一つ落つ」と共に永久に輝くであらう。

定價貳圓五拾錢……………玄文社詩歌部發行

野口米次郎詩論 野口米次郎著

世界的詩人野口米次郎氏が、さきに英國文壇の桂冠詩人ロバート・ブリッヂス氏及牛津モウダレン大學總長ワアレン博士の招聘に依り、同大學講堂に於て講演したる詩歌論である。古代より現代に至る我國詩歌の本体と精神とを詳説した空前の詩論である。當時英國の詩壇及思想界に一大驚異的感動を與へたもの、其論旨の幽玄にして暗示に富める、また觀察の細微にして批判の獨創的なる點は蓋し評論界の最大權威である。著者の詩と共に必讀すべし。

定價金貳圓……………玄文社詩歌部發行

野口米次郎英語著書目錄

- Seen and Unseen, 1897 and 1920.
The Voice of the Valley, 1898.
The American Diary of a Japanese Girl, 1902,
1903, 1904 and 1913.
From the Eastern Sea, 1902, 1903, 1904 and 1910.
The Summer Clouds, 1906.
Ten Kyogens, 1907.
The Pilgrimage, 1909 and 1912.
Lafcadio Hearn in Japan, 1911, 1912 and 1919.
Through the Torii, 1914 and 1921.
The Spirit of Japanese Poetry, 1914.
The Spirit of Japanese Art, 1915.
The Story of Yone Noguchi, 1915.
Japanese Hokkus, 1920.
Hiroshige, 1921.
Japan and America, 1921.

日本語著書目錄

- | | |
|----------|---------|
| 歸朝の記 | 千九百三年。 |
| 英米の十三年 | 千九百四年。 |
| 朝顔嬢の米國日記 | 千九百五年。 |
| 日本詩歌論 | 千九百十五年。 |
| 歐州文壇印象記 | 千九百十六年。 |
| 六大浮世繪師 | 千九百十八年。 |
| 日本の美術 | 千九百十九年。 |

YACHI
E